

婦  
子



第七卷

第二號

香

婦人と子ども第七卷第二號目次

卷首

奉祝紀元節繪はがき.....

愛犬.....

婦人と子ども

奉祝紀元節.....一

家庭に於ける諸儀式.....後 閑 菊 野...二

カレーとシチウ種の實驗.....記 者...四

素人診断學の必要.....糸 左 近...五

模範の家庭日課.....宮 川 す み...九

擊水餘韻.....東 牧 羊...一五

現代婦人の一大缺點.....記 者...一七

米國の小學校.....千 崎 如 立...一六

結婚と其時期.....湘 南...二三

火の要らぬ炬燵を見る.....な に が し...二六

ホーヘンリンドン會戰の詩.....田 代 勝 之 助...二九

保育局外觀.....岡 本 ち か...三五

四五才小兒の廻はし.....堀 内 新 泉...三七

料理.....石 井 泰 次 郎...三五

家庭小説琵琶の秘曲.....わ づ ま...四二

か伽訓話不思議の裁判.....

編輯記事

懸賞募集



(泰西名畫)

犬 愛



第七卷第二號

奉祝紀元節

雲に聳ゆる

高千穂の

高根おろしに

草も木も

なびき伏しけん

大御代を

仰く今日こそ

たのしけれ。

空に輝やく

日の本の

萬の國に

たぐへなき

國の御柱

たてしよを

仰ぐ今日こそ

たのしけれ。

香

婦人と家庭

家庭に於ける諸儀式

後 閑 菊 野

其一 誕生祝

誕生に就ての祝式は古い昔から行はれたことでございまして人の妻たる者懐胎するときは着帯の祝を始めとして産前産後に於てのいろ／＼の祝儀は上下貴賤の別なく何れも分に應じて行ふことゝなつて居ります今次々に其大様を述べて見ませう

着帯祝

腹帯を着けることは懐妊して五ヶ月になり時の吉日を選んでするが普通でございましてがまた稀には七ヶ月目にするにもありませす其帯は昔は 夫或は實家より其外上下の殊に親しい人又は子孫繁昌なる人々より贈ることとでございまして之を結びますには嫡妻には其夫たる人手づから之を結

びました例がまゝでございませす其一二の例を申して見ますれば皇后御着帯部類と申す書物に次の事が記してございませす

寛喜二年十一月十一日戊戌今日中宮磁子 御懷妊に依て御着帯の事あり件の御帯は 北白河院國母 より之を調獻せらる藏人頭右中將藤原基氏朝臣御使として參上す 中略 女房權太夫之を取りて御前に持參す宮を開きて御覽せらる次に大進忠高を召し御加持を爲さしむ次に典藥頭和氣基成朝臣御手水間に參進し仙召子、二七丸を進らす次に吉時を以て吉方に向ひ御帯を着御主上結び 奉らしめ給ふ云々

又吾妻鏡にも

養和二年三月九日己卯御臺所 源賴朝 御着帯なり 千葉介常胤妻殊仰に依て孫子小太郎胤政を以て使となし御帯を獻す武衛 源賴朝 之を結びしめ 奉り給ふ丹後局陪膳に候す

日に於ては帯は實家より妊娠後五ヶ月或は七ヶ月頃雙方の都合をはかり吉辰を選び紅白二様の絹或は布を長さ八尺乃至一丈二尺とし之をたゝみ奉書紙に包み水引を掛け三方或は臺又は廣蓋等に載せ之に長熨斗を添へ又別に魚類を添へて然るべき使を選んで之を贈るのでございます帯のたゝみやうは堅の兩方の端を中で合はせて又その如くうちへ兩方からたゝみ又それを二つに折りその細くたゝんだのを横に四つに折るが古禮でございます廣蓋に載せるときは帯の端の方を人の右になるやうにするがよろしうございませう帯を着けることは只今では此日産婆を呼びまして通例にさせます使の者へは其身分に應じて或は酒肴を饗し或は祝儀として金子を贈るも宜しうございませう産婆にも酒肴を出し祝儀の金子を遣はすのでございませう此日家内に於ては祝宴を開きまして母子の健康を祝するのがよろしうございませう場合によつては實家の父母を招いて共に祝ふもよろしいのでございませう

祝宴の大小は身分場合に應ずべきものでございましてあながち立派にせねばならぬものではございませぬ例へば赤飯をたき頭つきの焼物をそへるとか位の事でもいさゝかあらたまつた處があればそれでよろしいのでございますから富まぬ家でも決して出来にくい事ではございませぬ。

この腹帯を着けるといふ事に就て一時は無用の事であるとか或は胎兒の發育を妨げる患があつて却て有害の事であるなどいふ説もございましたが細い帯で一部分を緊しくくるといふやうな締め方をすれば害にもなりません巾をひろくして（木綿半巾位）程よく纏ひかくならば決してさういふ患のないばかりではなく之がために腹部を暖め又下腹部の下垂を防いで胎兒の位置を適當に保ち母親の身体の運動を易くするなどの利益があるのでございます帯の地質は大抵晒木綿を用ゐるのでございますが又冬などはフラネルのやうな暖くてそして弾力のあるものを用ゐるもよろしい事てござ

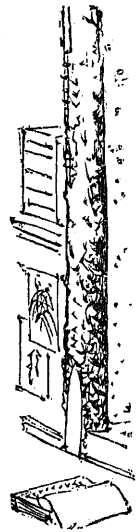
します

着帯は衛生上よい事ならばそれは用ゐるもよからうが前にもわるやうな儀式めいた事は無用ではないかといふ考を持たれる方もございませうが決して無用の事ではございません子供は生れいで、後初めて之を保護し之を教育すべきものではございません母の胎内にある時から既に之に注意せねばならぬのでございませんからかやうに着帯式などを行ひますのも亦其の母親の健康をいのり子供の保護を手厚くする所以でございまして之がために

カレーとシチューの種

先頃の新聞にライスカレーとシチュー及ハヤレライス固形にされたものが賣り出されたと云ふことが書いてあつたので早速買つて實驗してみました所が種と云ふのは何れも直径一寸四分程の圓形の固形物で厚さが八分ばかりありましてカレの方は黄色を帯びてカレ、先づ香氣鼻を衝きますがシチューの方は赤色を帯びて居て牛脂の香ひがするやうです、先づ方法書にゐる通りカレー種を一個鍋に入れ湯一合ばかり入れて火の上にかけて煮子でかき廻はしたらどろ／＼になりまして中からは肉の細片とく／＼に煮えたり玉葱の細いのが出ました暫らく暖ためて炊きたての飯の上には掛けて食へるのに味は中々悪くないです。唯方々書にもある通り葱を今少し足す方がよい様です代價は一人前六錢だから高くはないが總菜にする譯には行かない様だ。但し自炊者には頗る重寶で

母親は自然と身を慎む念を深くし間接には胎兒の保護にもなるのでございませうそれに一家に於て時々何やかやと祝式などを行ひますのは家庭の趣味を益す方法としても亦大層よい事のやうに感じます初めて懐胎をした花嫁さんなどには殊に之を鄭重に行て其母を祝ひ其胎兒の出生を歓迎する意を表はしたいものでございませうこの着帯祝を初めていたしましてこれより産所の式、七夜の祝ひ、宮參などさま／＼ございませうからおひ／＼是等の事をもお話して見ようと思ひます



# 素人診断學の必要

糸 左 近

近來何れの雑誌何れの新聞にも、「如何にして結核を豫防す可きか」とか、「余の長命法」とかと、いふやうな題目を載せて、さらでだに長生したがる人々を、嬉しがらせる事が流行する、其他生理衛生或は疾病治療に關する書物も、續々刊行せらる、之を或る論者は、人を憶病にせしむる弊害が伴ふと、杞憂するけれど、兎に角衛生思想の發達せる徴候で、強健なる國民を養成する上に於て、大に賀す可き事であらう。さは去りながらそれに就いて余の不審に堪へぬ事がある、それは何かと云ふに、斯る衛生思想の普及しつゝあるにも拘らず、何人も最も心得て居らねばならぬ診断學上の智識

を、何せ養成せぬか、何せ學びたいと思はぬか、この二つである、と云ふと、それは醫士の領分で、醫士ならぬ我等が此の頻繁なる世の中に立つて、其様な事まで穿鑿する暇が無いと、言はるゝかも知れぬ、けれども、余に言はしむれば頻繁なる世の中だから心得ねばならぬ必要があるのだ、尤も余とても醫士ならぬ素人方に醫士の心得可き診断學を悉皆研究せよと注文するでは無い、即ち何うあつても知らねばならぬ範圍内だけ、換言すれば余の所謂素人診断學を心得て戴きたいと申すのである、請ふ其の必要なる理由を述べさせて下さる。

素人診断學の智識は三大幸福を生む所の母である、第一は瞬間を争ふ人命を何程繋ぐかも知れぬ、殊に泣くより外に何一つ言ふこと知らぬ可憐の艦子を育てる父母は之を委ますと委ますに於て、此の知識は莫大の功がある、咳嗽聲一つ聞いても、ハテナ乾いてゐて、短かく小さく、痛みあるが如く、コホン／＼ヒューこれア實扶的里亞の疑があ



る、乃で電話の有る家なら早速チリ〜チリン「モ  
 シ〜先生恐れながら血清御持參大至急御來診を  
 願ひたい」とかける、醫士も其の心得で來るから  
 直様注射して目出度〜だが、診斷學の智識が無  
 いと、實扶的里亞は晝間左程苦しまぬ病であるか  
 ら「先生御手際になつたら一寸御見舞下さいまし」  
 位を云ふ、醫士も方々の往診を濟してから、悠々  
 出懸ると、豈圖らんや末期に近づいてる、さア大  
 變使を遣つて血清を取寄せ下ささ、血清の來た時  
 分は最早嘆き悲めども更に其の甲斐有る可からず  
 右は唯實扶的里亞の一例だが、尙進んで言へば、  
 身體に熱が有つて、瞳孔が小さくなり、而も斜視  
 の風を呈はすは腦膜炎だと、診斷することが出來  
 れば、冷頭温脚の處置をしてゐて、一方醫士を  
 招くから助かるけれど、診斷が就かねば勿論其の  
 處置もせぬ、従つて死ぬ。又初生兒の出産後間も  
 無く眼中に少し赤みを帯ぶるは膿漏眼で無からう  
 か、斯う疑ふと疑はぬは盲目にするにせぬとの境、

其他、泣聲・口中・糞便・腹部の抵抗力等、之を知つ  
 てる親と知らぬ親とは、文明野蠻の岐るゝ所であ  
 る、今一步進んで、大人の例を擧れば、俄然眼球  
 の陥没して、眼瞼の周圍に赤色或は青色を呈はし、  
 皮膚に粘い汗を發してゐる者を見たら、虎列刺顔と  
 望診して、危きに近寄りぬとか、或は又夏日旅行  
 して路に倒れてゐる人を見、皮膚に手を觸れ、「皮膚  
 は非常に乾燥してゐて而も大熱がある、これは日  
 射病だ、或は「皮膚は少し熱して居れども、大い  
 に濕うてゐて、而も顔面は蒼白い、これは腦貧血  
 である」斯う鑑定するとせぬとに依て、其の處置  
 が違ふ、若し前者ならば一水桶の水を全身に掛け  
 ば直様蘇生するけれど、若し後者ならば一口の水  
 を顔面のみを吹いて、オーイと大聲に呼ばねばな  
 らぬ、然るに炎天に倒れてゐる者だから、日射病に  
 相違無からう位で、後者に一水桶の水をガブ〜  
 注いだとすれば、實に有難迷惑イヤ迷惑どころか、  
 助かる可き命を殺すのだ、實に診斷學の智識は誰

にでも有りたものである。第二は診断學の智識を、人世の一大事たる結婚に應用する事が出来る、何某は大學を優等に卒業して銀時計も頂いた男、品行も方正、實に有爲の士であると、詳しく探偵しても、寸分それに違はぬ、何子嬢は風姿も美しく、性質も溫和、加之に學問技藝も有ると、能々聞糾しても更に媒妁口に虚言は無い、是に於て愈々見合をする、所が眠球突出せるかの如く見え、鼻翼動く、これは呼吸困難の徴、好男子惜むらくはバセドー氏病に罹つてゐる、色白く頸長く、頬に少し赤みがある、眼球に一種の黒みを帯び、身體はナヨ／＼と柳の如し、これは結核の素因があるらしい、嗚呼憐む可し美人薄命だわいとか、斯様に望診するとせぬとは、一世の苦業を共にせんとする者には、實に大切であつて、輕々しく三々九度の盃をなし、後に悔いても泣いても仕方が無い——それは出入の醫士に尋ねる所が醫士は、縦ひ本人の親兄弟にでも、病の秘密を洩せば、重禁

錮に處せらるゝ法律があるから、決して人の病を彼は答へぬ、されば何うしても素人自身に望診する所の智識が無くてはならぬ、嗚呼診断學の智識は實に「お前百までわしや九十九まで」と誓はしむる否實行せしむる眞の媒妁人である。第三は此の智識をいとも尊き教育上に應用することが出来る、詳しく言へば、小中大の學校長若くは教員たる者は是非共此の智識無かる可からずだ。此兒は皮膚蒼白く、筋肉瘦せて潤ひ無く、顔面は浮腫あるかの如く見え、皮膚は僅かの刺戟で紅くなり易い、靜脈は透いて見ゆる、父兄を呼んで曰く「御長男は腺病質らしい、早く醫士の診療を受け、二年は休核して、身體を挽回したる上、再び入學せしめられよ。」君の角膜は何と無く變だ。一寸眼瞼結膜を見せ玉へ」と之を綱せば大いに充血して、粟粒の如き物が一面に在る、「これア大變だ、トラホームだらう、歸宅後早々眼科醫の許へ行き玉へ。」彼の視勢はキヨロ／＼と浮動し、屢々遠

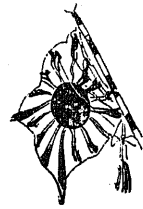
方を見るが如き状態を呈してゐる、或は精神に異常を來してゐるだらう、今年で文學士となるのだけれど、さうならぬ中に静養させて、而も他業に轉しさせた方が彼前途の爲に幸福である。斯の如く、校長或は教員に診断學の智識が有つたら、生徒の爲に何れ程大利益を蒙るか知れぬ、——學、校醫がある、それは有るけれど、一月或は一年に、一度や二度來て、幾百千人の生徒を、一々診断出

來るものではない、故に學校醫は校長或は教員の素人診断をしたる後の顧問者であると心得られた。右の次第であるから、余は文部大臣に懇請する、中學校高等女學校教師範學校高等師範學校及び文科大學等には、必ず素人診断學の科目を加へられ、漸次國民一般に、此の智識の普及するやう、あらまほしく。

シチュー種の實驗

(第五頁より續く)

此シチュー種も大體前のカレー種と同様に鍋にとかしてどろ／＼にしたらば肉の細片が澤山出て來ましたがにんじんは疾くにとろけてしまつた爲めか汁が赤くなつて居るばかりです。其汁を味つて見るとさつぱりして中々よいですが肉には鹽が染み過ぎて居る様です。方法書通りにすると、うでたジャガ芋と人參を入れて食べるのですが夫れよりは別法の様に葱を細かくしたものを入れてカレーの様に暖たかい御飯にかけてハヤシライスにして食べた方がよい様です。併し是もカレー種と同じく立派な主婦ある家では火急の場合の外は別段重寶でもありません。兎に角其價値は家には重寶な物でせう。店主の云ふ所り進物などには一寸よいかも知れません。兎に角其價値は懷中しるゝが本物のしるゝに對すると同じ様なものと思つたら間違はないでせう(發賣店は神田猿樂町二五岡島商店)



# 家庭日課

宮川 すみ

家庭の日中行事や一週の仕事の配り方これは一度か二度どなたかへ申上りましたから重複いたします事と思ひますけれどもこれは出来るだけ真似てもよろしからふと思はれますから御話いたしましやう。まわ一日の仕事はどういふ風にして居りましやうか。

朝下婢は主人よりはやく起きましてまづ第一にストープをたきつけそれから入口の石段を砥石で磨き奇麗にいたします。恰度我が國でまわ人様の御見えにならないうちに御玄関を拭いてといふやうなわけで、それから格子戸板戸その他棧になつて居ります處をふくと同様にあちらでは各戸の取手其

他眞鍮で造りつけられてありますものを磨きま  
す。

これがすみすますと食堂の火をたき御湯を沸かしま  
すその間に朝飯の用意それは簡単に

パンを薄く切りたるものやさしもの所謂ト  
ストにバターその他ジャミをつけベーコン（豚の

肉）の焼きたるものやゆで 卵  
これにコーヒ―或は茶をそへて朝食

その間に主婦は小供を起し衣類何くれの世話をし  
て時間になりますと食堂にゆき清き朝の食卓につ

き集り來れる元氣よき小供等の父様からベーコン  
の焼きたるものや玉子を分配していたゞけは母様

からはコーヒ―或は茶のあまりこくなきを注いでい  
たいき幸福なる一日の門出の食事をいたします。

此間下婢は各寢室にゆき寝具を一つ／＼椅子の上  
にかけ日光に暴露し風を通し顔洗ひの水をすて、

部屋を奇麗にし、それから自分食事して後食器を  
わらひきよめます。

主婦や娘は食後各室内の器物のカラ拭(乾キタル  
布巾ニテ拭)をし花の新しいきにさしかへ水をか  
へ清らかに致します。

下婢は寢室に入り寢具をはらひ夜寢の準備をして  
まわあちらで「床を敷く」といふわけです寢室が  
別てありますから朝直く寢床を設くるわけ、それ  
から蠟燭立てやその他の金物を磨ききれいにいた  
します。

晝食後になりますと初めて客間のストーブをたき  
主婦も下婢も皆服装をあらためまして四時から五  
六時頃まで訪問の客を接待する事が出来るやうに  
して居り御客の見えません間は縫ひ物つぎ物など  
をしあるは讀物などをし一寸もボンヤリすごすや  
うな事はありません。夜になりますれば一家團欒  
の泉たる夕食の卓をかこみます寢室に行く六時か  
六時半にいのりをしてねます食堂に出ますのは只  
年長の子弟のみです年長じたる男兒の幾分思慮あ  
るらしき話、女兒のやさしきなかに道德的な凛と

したる處ある話に應答しとやかに無言の中に種々  
の作法を教へつゝ一日の苦勞も全くわすれいろ  
ゝの話に時として品を落とすやうの話の材料にら  
つれば注意ふかき主婦の清く高き材料にかへて何  
處までも清く美しき食卓上の華をさかせ花瓶の花  
にきそはせ、一家のつかれは全くたのしさにけさ  
れてあすの元氣をつければ生存競争の烈しき中に  
立ちて充分快戦し得る力を興させます。

やがて寝るべき時間になりますれば一同娘むすこ  
下女下男まで今日の平和を神に感謝しあすも清く  
すでさん事を祈りましてそれからあたゝかき寢に  
つきます、まわこれが一日中の事。

一週間中にはまた仕事配つてありまして  
日、安息日、前日配布せられし衣類と着變  
月、洗濯日  
火、部屋大掃除  
水、寢室大掃除  
木、食堂、階段、廊下、大掃除

金、客室大掃除、金物磨キ  
土、臺所、物置、食物、貯蓄所、大掃除

といふやうに各家の都合によりましては、或は少しづゝのちがひはありまじやうが大躰をきめてあります、それでまづ土曜日の夕方寢臺の處へ洗濯致しました着更へを上から下まで揃へておさまして明日會堂に參ります時に清らかにしてゆくやうにさせその抜きかへました洗濯すべき物は室の隅にそなへてあります籠の中に入れておかせます月曜日には洗濯物の煮釜に水を入れて湯をわかします其間各室から洗濯物をあつめて來まして洗濯をいたします。まづその着物に孔はなきか綻はなきかを一通りあらためましてその孔は一寸かゝりまして孔が大きくならないやうにしておきそれから上着と下着、毛織物と木綿物、絹物、ハンカチーフとまた色物と白き物と皆分類しまして金巾類や襯衣のやうな白きものをソーダ水の中につけておきやがて順をおひまして洗濯に取りかゝります

まあそれにはシャボン水、煮釜、洗濯袋、ブリユーを用意してそれから食鹽も少許ソーダも少許それがとゝのひましたらば始めます

シャボン水 は鍋の中にシャボンを細かく切りまして沸かしました御湯を左手にてつきつゝ、右手にてかさまはしながらとがしてこしらへます。

洗濯袋 金巾にても木綿にてもよし四角につくり三方を縫ひまして角の一ヶ所孔をあけて

水を出す事が出来るやうにこしらへます

ブリユー は白き物をあらひたる後青味を加へる爲めに少許り水にとかしうすく蒼色位にして用ふ

食鹽 これはハンカチーフの如きものを洗ふ時一種の消毒用に水にとがして用ふ

ソーダ 煮釜に石鹼を入れて共に煮沸し洗濯物を煮る際に用ふ

毛織物を洗濯いたしまするはどういたしましたがよろしう御座りまじやうかと云ふに

まづ前にこしらへましたシャボン水を洗濯器に少し移しましてよくかきまぜて泡を澤山立てまして其泡の中へ恰度微温湯の中へ洗ひますものを入れてたいつかみましてシャボンの泡を通します斗り決して揉まずに泡の中でつかみながらそををして居ります中泡がなくなりまた水が汚れましたらばまたシャボン水を取りかへまして洗ひそれからまた同じく微温湯で臭のなくなりますまで二三回濯ぎますそれからやはりつかみ兩手で壓して搾り決して振りまして木綿物を絞る時のやうにせぬやうにしておきます。毛織物だけは熱湯で洗ひますと赤褐色がこげたやうになつてしまいますし、水であらひますと縮んでしまいますからきつと微温湯でなければいけません又揉みますと粒々が出来ますからそれもよく氣をつけないければなりません。毛織物がすみまして金巾や木綿の品物さきにソーダ水へつけておきました、それは洗ひ板へかけて先きのシャボン水であらひますそれには別段の注

意もいりませんあとをよくすすぎて臭のなくなる迄でにいたします。

ハンカチーフこれは一寸小さなものなればかまはぬやうですが手を拭き鼻を拭き口をふきいろく用の用をして居りますものですからまた種々微菌なども着きやすくそのおそれがありますから他のものと別にして食鹽水の中につけておきます。それをお湯であらひお湯でよくすすぎます。

さわこれで洗ひ物がすみましたからこれを洗濯袋へ幾度にも分けまして入れ、それをさきの煮釜の中へ二十分位入れまして煮ます、それからそれを上へあげまして水をはへます、水は孔から出まして雑作なく引きあげられますそれでそれから洗濯物をとりに出しなほ湯で二回位すすぎ終りに金巾物のやうの類ならば冷水にてあらひ後ブルーをとりました中へ絞りましたのをひろげまして入れ、あげて乾かしますまわ一寸青すませるのでそれを絞りました儘で入れますと縞になりますから

ひろげて入れます事をわすれぬやうにせねばなりません。

まわこれて今日月曜日の仕事はすませましたそれが生かはその時に裏から縦糸にそひまして軽く火熨斗をかけ、それから表にかへしましてよくかけますとあの艶が出ます。

火曜日大掃除まづ室内の物にて動かさるゝものだけは皆移しテールのやうなものはそのまゝにし其上に小かき品をのせカーペットの四角をあつめし塵のかゝらぬやうにしてピアノの上にも風呂敷でもかけ隅から隅まで天井から窓硝子凡て掃除してその部屋の煤掃きのやうにしてこれを毎週いたします。

午後にはハンカチーフ其他細かきものゝ火熨斗をかけなどして一日を終ります。

水曜日寢室掃除これもきのふのやうに丁寧にいたします。

木曜日食堂は前の部屋と同じく掃除して階段廊下

のカーペットをはがしこれをおさへておきます真鍮の棒もとりはづしましてみがき清潔に出来るたけいたします。

金曜日客間の大掃除明日あたりはお客様も見ゆべし大抵招待の御客は、土曜日なればよく御掃除して手おちなきやうにころして掃除おはれば

午後金物のみかきかく

土曜日臺所物置の大掃除食物貯蓄所も掃除して明日は日曜何れの店にても物品を販賣せねばそれ

入用の品物を買ひとゝのへおき恰度一年中の大晦日のやうそれから御客様が来て遊びたのしみ

物見遊山をしたのしむも今日にて恰度わが日曜日の如し。

日曜日今日は常より少々おそく起き客室を一寸掃除して他は何事もなさず會堂にゆき午後一時頃晝

食の卓をかこみ常ならば夕食を御馳走にすれども今日は夕方をあつさりとして御晝に御馳走にし夕方方は冷肉とサラダ位にしておき下婢を教會に遣



します小供は午後から日曜學校にゆきまして神様の事をさかされまして習慣上ブランコにもものらずおとなしき一日をすごします。

各教會は各町内に一つ位づゝありて其處に各家内の腰掛をそなへおき一家打揃ひて一週一日心も體も息め靈的の事につきて心をひそめ反省をうながされ種々の事業の上へ眞面目なる考を及ぼすべき源となり従て英國社會の良風を來しつゝある泉となりこゝより清き氣風は湧き出で、今日あるなるべしこの點を見ずしては英國の今日を來せる事の起因を知らずしてたい人の往來の繁き煙突の煙に巻かれたるのみ日本に來りて風景をながめて日本魂を解せずして歸る外人に比すべし。

まわ此の様に家庭に規矩あるためには朝起きて今日はこれをしやうかわれをしましやうかと洗濯物も集り次第何のあてどもなく考へまどひ時間を費やす間に餘程の仕事も書見も出來ます日に月にすゝみゆくありかたき大御代に世界に轟きわたれる

日本の國の基をかたひべき各家庭に於て事毎に考へて時間を徒らにするその時を百戸二百戸あつても大した時間まして萬を以て數ふる各家庭に於て仕事の配り方に氣をつけられましたならばそしてその間に實業なり何なり生産の事をなさば國の富むはいはでもの事あゝ今日の日にをしき事してすござん事の口惜しさいかだよしと思はゞ二三軒約束して實行し初め次第にひろげなば御國の爲此上なき幸にして女としての御恵にこたへまつるべき一端ならんに。



# 撃水餘韻(世に姦まよき婦人)

東 牧 羊

## 美術と奢侈

婦人向きの美術品、近年益々精巧の域に進むといふ。美術の進歩固より喜ばしきことなれども、由來、美術と奢侈とは極めて深き親戚の間柄なることを忘るべからず。國歩艱難は、たゞに戰爭當時のこととのみ思ふべからず。戦後經營は、啻に戰爭の翌年のこととのみ考ふべからず。二者は今尙現在目前に逍遙しつゝあり、恐くは長き將來に於ても然らん。深く心に銘せざるべからず。

## 身體自身の美

由來我が婦人は、頭の飾りや衣服等には、中々八釜しく念を入れて金をかけるなり。所謂身の廻りの裝飾には恐ろしく心を凝らすなり。従つて我國の婦人服の模様の如き美術としては、恐らく世界に冠たるものあらん。然れども身體自身の裝飾

に至りては比較的甚だ心を用ひざるが如し。化粧法の如き、頭髮と顔の形との關係の如き、身體の姿勢、こなし方の如き、表情の方法、笑顔の研究の如きつまり、比較的金のかゝらぬ身體其ものを以て對手に美を感じしむる方の研究は尙大に進まざるが如し。

## 良妻賢母と教育

良妻賢母たらしむる目的ならば、餘りに高き教育を婦人に受けしむること、少くとも今の時代に於ては考へ物なり。受けたる少數は期望の通りの婚嫁を得べけんも、多數は其時期を失するの悲運を見るなり。實例も多く理由も明白なり。

## 學問の奴隸(一)

吾が知れる一老婦人あり、齡既に七十七嬰鑠たる健康壯者を凌ぐ。然も能く論じ能く談じ好んで學生を世話し又彼等と伍するを喜ぶ。會々其家に寄寓せし順良可憐の一學生、奮つて試験に及第し某女學校に入る。老婦人歎じて曰く、「わゝいゝ順良

な方は、此上學校に入らずとも何んな立派な所の  
奥様にでもなれるものを、近頃の方は、皆學問々々  
と仰つて學校にお入りになる、私はそんな方を  
學問の奴隷だと申すのです」と氣傲萬丈。

學問と嬉み

學力の進むに従ひ、婦人の嬉み一層高くなるべき  
理屈なれども、實際に於ては必らずしも二つのも  
のは一致せざるが如し。相當の教育を受け、相當  
の學問ある人にして、わたら婦人としての嬉みの缺  
けたるが爲めに、他人に指彈せらるゝ人、世に少  
からず。「學は禮に終はる」といふ支那の學者の言  
葉さへあるに。

金? 金? 金?

「巨萬の富」は、現代男も女も老人も青年も、等し  
く其理想とする所のもの、如し。然もこれを得て  
果して何に使用すべきかといふことに至りては、  
又等しく考へざるに似たり。多くは富を得て、安  
心を得んことを希望せるものなるべし。然も一家

の波瀾は常に富者の家庭に於て多く起るを見れば  
富者必らずしも安心を得とは限らず、否な「富者の  
天國に入るは駱駝の針の孔を通るよりも尙難し」  
とさへいはるゝにわらずや。精神的の安心は、物  
質的の金によりては、到底得らるべくもわらず。  
天命を知り境遇に安んじ其業を樂しむに至りて始  
めてこれを得べし。何を着ん何を食はんとて思ひ  
煩ふなかれ、野の百合を見よ、空飛ぶ鳥を見よ、  
勤めず紡がず、然も神は、これを養ひ給ふとの山  
上の教訓、まことに現代黃金熱に病める人の服す  
べき良劑ならずや。鶴鶴巢於森林、不過一枝、偃  
鼠飲河、不過滿腹、とは莊周の言葉、又以て味ふ  
べきにわらずや。

風紀の頹廢

風紀の頹廢今日の如く甚しきはなしといふ人多け  
れども、それは疑問なり、事實これを十年若くは二  
十年前と比較して如何にあるべき。たゞ今日に於  
ては女子が比較的より多く社會の表面に顯はるゝ

が故に、其男子との關係が、一層多く明に、社會に知れ渡るといふことも、大にあることを思はざるべからず。

施恩

他人に恩を施すは善事なり。但し何時々々までも

現代婦人の一缺點

芙 蓉 生

現代婦人には幾多の長所もあり、幾多の美點もあつて、迎も舊思想なる老婦人などの及ぶ所でないことは云はでものことであるが併し壘を得て蜀を望むの類でよい上にも尙善からんことを望むのは強ちに排斥するにも及ぶまいか、そこで吾人が現代の婦人に蜀壘の望を云は、其高等教育の學科中に今少し法律思想を加味せられんことである。實に現代の所謂教育ある婦人なるものは餘りに其思想の超世間的なるか若しくは沒社會的なるかの中である。然るに人は法に生れて法に死するもので行住座臥一刻も法律の範圍を脱することは出来ないものである。殊に今日の所謂文明と云ふのは法治の整頓に仍て益進歩して行くものであるから今日の人は其男女の何れを問はず大に法律的修養を要する次第である。且又有爲轉變は世の習ひであるから今日は輿様として重い物は箸より外に持たぬ様な方でも明日は主人公に代つて内政外交は勿論の事、時には人事紛争の間に理非曲直を訂して自から守るの用意をする必要がないとも限らぬ、否是よりは尙益此種の必要が多々益々起ることだらうと思ふ。殊に婦人に最も近き家事の紛争に關しては法律は極めて親切に種々の實踐倫道を示して居る。民法中の親族篇の如きは其最も著しきものである。幸に太田隆東子は毎號其平易なる説明を以て之を讀者に紹介しつゝあるは、大に時宜に適應せるもので、吾人は讀者の倦むことなく之を通讀せられんことを希望するのである。

恩に着する時に、受けたる人をして謝恩の念を失はしむるのみならず、反つて其人をして怨恨を抱かしむ。施恩の價値は、全くこれを忘失するに存す。聖經に曰く「右の手にて施したるを左の手に知らしむる勿れ」と。

米國の小學校

在桑港 朝露生

『如何ですか、おさんども大分慣れましたでせう。今日はチト學校の御話をさかして下さいませんか。何ですって、キャンデーを、アハ、ハ、ハ、よろしい。坊やは大入しくして學校の御話をしたり伯父さんはナイスキャンデーを澤山あげませう』

『アハ、ハ、御尋ねとあらば一々御答申上ますでござひませう。エ。其方の郷貫姓名を名乗れと仰つしやるのですか。私事は尋中の國四丁目と五丁目の角に住居いたし居り候ところ、この春海を一同とびにオー克蘭ド、コールスクールの六年級の椅子にかじりつき、唯今は切を以て七級に叙せられ居候事實正也』

『返濟の儀は八年級の終り、ハイスクールにてと云ふのですか、兎に角君は前途春秋に富んでゐるか

ら、まことに羨ましい。君のところの校長と受持の先生の名は何てすか』

『校長はミスター、チヨージ、フリックと云ふのです。七年級の先生はミス、ロビナ、フォグソンと申します。チヨージ先生は中々のやかましやでして、恐い顔して子たちを睨むばかりでは足らぬと見え、肩を捉へたり、胸をこづき廻したりして叱りこらすのです。日本ならさしむき閻魔先生の敬稱を呈するところですが、アメリカだけにダイナマイトとか煙火とか、それ相當の影帽子をいた、かせて置きます。フォグソン先生はやさしい先生ですよ、オールドミスは根性が悪いとは一般の評ですが、僕等の先生は中々親切です。校内第一だと云ふ評判です』

『さうですか、それは御仕合せですネ。チトその先生の授業ぶりを聞かせて下さいませんか』

『朝のありさまから御話いたしませう。僕等のやうなスクールボーイはランチと本とをかへてとば

とぼとやつてくるが、生徒のうち、少し遠いものは自轉車でやつてくるのです。いくら兩性混交教育だとして、教場外は全く隔離してゐます。僕等は碧い眼の腕白共と遊び戯れてゐるうちに九時になると、閻魔先生笛を鳴らします。第一の笛にて一年級の子どもは列をつくり、女兒たちも別のチャードにてそれぞれ級長のさしづのもとにならぶのです。この時鈴鳴りて一同直立不動の姿勢、第二の閻魔笛にて、組はそれぞれ別れ進行の仕度、校長の進めの一とことにてすゝみ出すのです。階段のあちこちに教師たちは立ちてゐて、監督して居るのです。この時は帽子を脱して左の胸にあて歩むものとしてゐます。教室に入ると、先生はオバコートコートを脱し帽子やらピンやらいろいろの装を解き教壇の前に立ちて、お早うと云ふのです。生徒一同聲をそろへてお早うミスファグソンと云ふこれが授業前の禮なんです。先生は胸に眼鏡を引ッかけて置き、時々高い鼻の上にチョット載せて

本を見るのです。一時間ごとに立ちて一同手をのばし、身をかゝめなどして、一寸と體操のやうなものをしていただきます。十時半に一度ヤードへ出て遊び十二時より一時までランチを食するため家にかへり、又はヤードにとゞまり、三時に全く放課となるのです。

「先生の云ふことは殘らず解りますか」

「この頃どうやらこうやら呑みこめますが、はじめのうちは少しもわからず唯べら棒に早い言葉のやうにのみ聞こえ、癪にさわつてなりませんでした。一生懸命、辭書と首引で教科書ばかり讀んでゐたやうなものでした」

「學科は何々ですか、そして教科書を御しらせ下さいませんか、出来ることなら一年級からのをどうかネ」

「他の級のことはよくわかりませんが自分の科せられて居るのは十一科位です、詩の暗誦、これは中々厄介でして、吾々異邦人には最も有益でまた

最も苦しいのです、音楽、これはどうせわかりませんから、さいて楽しんで居るばかり、それでも何とも云ひませぬのが面白い、暗算と普通算術、地理、歴史、生理、これ等は悉く自修せねばならず日本流の講義などは殆んどないと云ふてもよいのです。先生は唯日課點をとるために活きて居るやうなもの、だから生徒はよく勉強しますよ、そして教科書は中々よく出来てゐますから面白いです。その外に自然研究といふ一科ありて、生徒の理科についての研究談やうのものを批評し教導することもあります。文典、これは中々厄介もの、毎日各種の文章の解剖やら何やら、七面倒くさくて閉口します。作文と談話もありません。先生の直しかた甚だ上手、鼻眼鏡のありがたさがマアこゝらあたりでせう。習字、これは當時流行のナチエラルスラント、文字を真直に書くのです。右にも左にも曲げずに。圖書は實物の寫生です。讀本は生徒にその日その日貸し與へ色々のものを讀ませ

ます。童話その他史傳などもあり、時には新聞や雜誌をよますこともあり、これが中々有益なやうかたです。趣味は毎日新らしいから、一同たのしみにしてゐるのです。圖書室には授業中の外は何時でもゆくことが出来、また家にもちかへることも自由です。

他級の科程はよくわかりませんが、書籍目録だけでも申上げて置させよう。

プライマー并に第一讀本（加州教育課撰定）これは一年級、第二讀本、習字本二まで、これは二年級、三年級、第三讀本、音楽書第一、算術書第一位です。四年級は第三讀本、音楽書第二、地理書、習字本第四までといふやうなわけ。それから第四讀本、音楽書第三、算術書第二、地理書、習字本第五まで、これが五年級で、六年級は第四讀本、音楽書第四、算術書、地理書、文典、歴史、習字本、第六です。八年級は讀書は例の不定品、音楽書は六、代數書、幾何書、地理書、文典、生理書、歴

史、習字本七、これだけ叩きあげると卒業なのですが、英語の外は、何れも先刻承知のものばかり、つまりぬ想もいたしますが、珈琲は牛乳を加へて更らに風味を増すやうなもの、チト御苦勞様ですが、今年やつて見るつもりです。ア、大分ながくしやべつた、お菓子下さい、このキャンデーは甚だ不景氣ですナア」

「せいたく云ふてはいけません。サアお茶を入れましたよ君はどの科が得意ですか、チト御自慢をさゝませうか」

「どれでもと申しあげたいが英語はまだものになつて居らんからナア、しかしあとの科はみな中學校でやつたのですからどれでも優等です、通告表を御らん下さい。わけでも級中第一と吾もゆるし教師もほめて居るのは圖書です。一度薔薇の花の寫生をしたのが、ひどく教師の鼻眼鏡によく映じたと見え、各級をもち廻りて見せ、校内時ならぬ霞の音のやうに喝采せられたことがあります。

閻魔先生の像と老嬢閣下のとを徒ら書させるを見つければ、大きく書くべきことを命ぜられて、叱られる、ことかと思ひしに、反つて面目を施したことがございます。今では校内誰れもジャップ呼ばはりするものがなくなりました。先生は美術家になれよと暮りにすゝめるのです。わたしも或は畫學校にゆかうかしらと思ふことがあります」

「オイオイ君、君は坪内博士の昔書かれた「少年の心に於ける宇宙の變遷并に危険なる宇宙」といふ文を読んだことがありませんか。一度読んで御らん。大いに君を益するでせう。余りオダテに乗らぬやう御注意下さい。何ですかその、生徒の服装は一定してゐませうか。」

「服装ですか、さうですナア、別に制服も制帽もないやうです。男の子は大低オパーシヤーツにネクタイをかけコートはダブルボタンの一番多いやうです幼年者は半ずばんです。帽子はハットは極めてまれです、多くはキャップのふちをまくり



あげたるを頂いてゐます。女の子は髪を真中から  
 わくるもあり、横からわかるもあり、うしろにて  
 束ねたるも、兩脇に二岐としてさげたるもあり、  
 リボンは色々ですが、衣裳と同色なるをとるらし  
 いです。黒と赤とは御存じの通り配合は甚だ美的  
 ですから、黒衣のガールのリボンはマア赤ときま  
 ッてゐるやうなものです。中々美しいですよ、二  
 ツ三ツ寫生してきて御目にかけてませうか。異國の  
 なでしこも中々可憐です』  
 『左りにコートを合せ、日本式の眼なら丁度倒  
 まにつけそなたのような、しかも未熟の葡萄の  
 やうな眼の玉、蟻の女王様のやうな細腰で、テン  
 デ繪にはならぬではありませんか。』

本年四月入學セシムベキ當校私費地理、歴史、國語体操ノ兩專修科生各三十名  
 及保育實習科生八名ヲ募集ス志願者ハ來三月十五日マデニ當校到達ノ日取  
 テ以テ願書ニ履歷書戸籍抄本ヲ添ヘテ差出スベシ尙詳細ハ一月二十一、二、三  
 日ノ官報又ハ當校ニ就キ承合スベシ

明治四十年一月

女子高等師範學校

『あなたはさうばかり仰ツしやいますか蟻の女王  
 に驚の聲あることを御存知ありますまい。毎金  
 曜には談話會がありまして、ピアノの彈奏や唱歌  
 の獨吟など、とても人の子の技と思はれぬほど上  
 手なのがあります。私も學問の敵手になつてゐる  
 のだから、ほめたくはないが、覺へず喝采するこ  
 とがあります。』  
 『さうですか、何だか僕もグランマースクールに  
 入學したくなつたやうだ。今日はまことに面白  
 御話でした。どうですバアクへでも散歩させ  
 るか。』  
 『御供しませう。ア、もう夕景色ですよけふはサ  
 ンデーだからカツくり遊べるワケだ。』(終)

# 結婚と其時期

湘 南

婦女子に對して結婚の話をするに多少禪る所がないでもないが、併し結婚は人生の大儀で決して婦人だからとて度外に置く可きことでない。且又人は男女の別に拘はらず何れも皆結婚によりて始めて其人格を完ふることが出来るので獨身生活が完全なる人生の理想や典型を現實す可き筈のものでは決してないのであるから。吾人が茲に斯様な議論をしたからとて強ちに咎められる憂もなからうかと思ふ。畢竟するに結婚は神聖なもので而も偉大な精神的目的を有するものと云はなければならぬ。何故なれば元來人間と云ふものは社會的生活をしなければ満足出来ない筈の者で假令一時は何かの刺戟で各人個別の生活をする様な事があつても暫くの中には自然と相寄り相集つて群をなし部落を作ると云ふことになるに極つて居る

のみならず異性の男女は必ず合體して一對の夫婦となり之が一つの完全な人格を形くつて夫は妻を扶助し妻は夫を扶け補ふと云ふ様になつて茲に満足なる人間の社會生活と云ふものが出来る様になるのである。是が人間の間たる所で即ち人生の本務であつて決して恥ぢたり嫌つたりす可き筈のものではないのである。然るに世には殊更に是を避けて以て獨居孤立の生活をして男は妻なるものゝ爲めに系累を生じたり首かせを得たりすることを嫌ふものがあるし。女子にしても徒らに男子の願使に甘んぜんやと自ら獨立渡世の用意して却つて男子をして職業上の競争に敗を取らしむる輩が、今日では中々に尠からぬ様になつて來た勿論女子が昔日の卑屈なる境遇を脱して漸次優勝なる位置に進みつゝあるは誠に慶賀す可きものではあるが之と共に徒らに時代の風潮に驅られて人生の大眼目なる此結婚期を失するものを生ずること漸く多きを加へ様とするものがあるには誠に慨

嘆に堪えぬ次第だと思ふ。吾輩は繰り返して云ふが結婚は人生の目的を遂行するに最も必要な出發點であつて人生の眞意義は是より始まり是より起るのである。尙ほ言ひ變へたら是より以後が即ち人生とか生活とか云ふべき筈のもので是より以前は單に其準備の時代に過ぎないのである。結婚は斯の様に重大な意味を持って居るものであるから其結婚の儀式と云ふものは、東西を問はず昔から頗る嚴重で頗る窮屈なものであつたのである。何故又そんなに窮屈に嚴重にしたものであるかと云へば之を人性の欲するが儘に放任したならば種々の弊害や争鬭や罪惡が續々出て來て仕方がないからである。

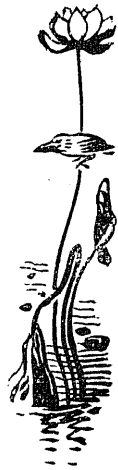
以上述べた様に結婚なるものが神聖であり道德的なるものであるとしたならば、然らば其時期は何時が最も適當であらうかは次の問題であらう。故福澤先生は嘗つて其福翁百話の中に早婚必ずしも弊なしなど云はれて女子は十四五歳でも結婚し

てよいかの様に云はれたが併し今日では是は到底用ゆ可きことではあるまいと思ふ。我民法でも今日では男十七歳女子は満十五歳以上と云ふ明文がある位だから是より以前には勿論不可であると言はねばならぬ。是は議論する必要はなからう。然らば次に民法規定の通り女子は十五歳に達したら最早差支なきかと云ふに是も考へものだらうと思ふ。何となれば法律は止むを得ない最低限を示したので決して是れで充分と認めただのではないのである。考へても見たまへ満十五歳と云へば數へ年の十六七である。十六七のまな娘に逆も碌な家庭を形くることが出来る筈のものでない。高等女學校の課程さへもまだ了らない年輩ではないか。然らば高等女學校を終つた頃即ち十八九歳の頃は何うであるかと云ふに吾人は是でもまだくせくには及ばないと思ふ。一體家庭と云ふものはそう無造作に經營できるものではない。男女が同居して居るからとて直に家庭で候とは云へないの

である。家庭には特殊の目的あり統一あり秩序を有するばかりでなく之を主宰するものに對してはあらゆる方面の智識と見識と技能とを要するものである。是を思はないで唯もを早く丸髪にでも結つて見たいなど、思つたら飛んでもない間違である。

早い話が、苟も一家を形づくると云ふ以上は第一に經濟上に於て世と奮闘しなければならぬ。是が中々刺腕を要するので決して有るものは遣へ要るものは買へと云ふ譯には逆も行かないものである。恐れ多いことだが上御一人でさへ承る所に依ればいろく御儉約があると云ふ位だもの況して一般の生活には足らぬがあたり前の事である。金持は金持だけに金が要らうし華族さんは華族さん丈に金が要らう決して困るものはないだらうと思ふ。勿論吾々貧乏人は論外で話にも何もならないが併し道理は同じ事ではなからうか。實際家庭の苦樂の半ば、決して金の多少にあ

らずして家事經濟の方針如何にありと云ふことが出来る。換言したれば主婦其人の意志如何にありと云ふべきものである。此の如き見識は生若い婦人には少し六ヶ敷ものであらう。尤も忠實な三太夫の居る家は別物であるが。次には實際の家庭經營であるが之を精神的慰安的に平和なるホームたらしめんには夫々多方面に注意し熟練なる鹽梅を試みる必要があるが之も女學校出立の書生さんには少々骨が折れ過ぎるだらうと思ふ。最後に之を育児の方面から統計を調べて見るのに幼児の最も健康に生ひ立つのは重に廿歳以上廿八歳迄女子の産する所であるのを見ると女子の最も充分なる婚期は廿歳より廿五六歳迄の間にありと云ふことが出来ると思ふ。即ち女子は此時期に於て良縁を求めて歸する所がなければならぬものである。要するに吾人は生理上よりも精神上よりも將又家庭經營上よりも二十歳頃より婚期の始まるものなることを主張せんと欲するのである。



火の要らぬ炬燵を見る

なにがし

讀者は既に前々號の誌上で火なしかまどと云ふものが亞米利加で利用されて居ると云ふことを御承知でせうが我輩も彼の記事を見て一方ならず興味を起して一つ實驗して見たいと思つて居る所です否讀者の中には既に實驗に取りかゝつて居られる方があるかも知れぬ、其實驗の結果は何んものだらうか一つ伺ひたいものである。聞く所に依れば近藤耕造氏は彼記事を紹介して後、自ら簡便なる装置を工夫して今盛に實驗して居られるそうだとすして、其結果は何れ本誌上に於て讀者に披露せらるゝそうだから其時は完全なる本邦的の火なしかまどの構造と其利用の方法とが明になり、

従つて本邦の臺所には薪炭の上に一大革命が起るだらうと思ふ、併し是は名こそ火なしかまどであるが或物を此かまどで煮様と云ふには兎も角最初一度は養立てなければならぬ事は彼の記事に見えた通りである。所が今又是にも増して重寶な發熱器だと云ふのが出來たには驚かねばなるまい。今茲に紹介し様と思ふ火なし炬燵が即ち其れである是は炭や薪などは始めから少しも遣はず或藥品を以て化學作用に依りて自然に熱を起させ様と云ふのであるから是が成功した日には日本の炭屋や薪屋は到底商賣變をしなければならぬ譯である。又其時こそは我國の家庭に一大革命が來ることであらう殊に我々貧乏書生には此上もない有り難い福音であると云はなければならぬ。然らば其火なし炬燵と云ふのは如何なるものであるかと云ふに記者の實見したものは湯たんぼ形に出來た(鐵又トタン等の金屬製)器に引き出しがあつて之を抽き出して見ると中には多くの鐵屑と或藥品(何う

も食鹽が主成分らしい）が入つて居て盛んに一種の瓦斯體を發散しつゝあつた（此瓦斯が一吋いやな臭がする）それで試みに其器に手を觸れて見ると丁度湯たんぼの入れ立て位に盛んに發達して居つた發賣人の云ふ所に依ると此普通なのが華氏百二十度の發熱力を持つて居ると云つて居た。華氏の百二十度と云へば之を攝氏に換算するとざつと五十度ばかりであるから成程湯たんぼや炬燵代りにして老人や子供の保護器には持つて來いと云ふ譯だ。併し慾ばりな寒がりには五十度では少し足りないかも知れぬ。けれども工夫したらばまだく熱度が高まりさうなものだと思ふ。發賣人の云ふ懷爐用のものは發熱百八十度に達すると云つて居る。是を攝氏に換算すると八十餘度であるから是れならば炬燵や湯たんぼ代りとしては申分のない温度で、時には少し熱過ぎるかも知れぬ。と思ふ。發明人も工夫して此方をも普通のものに用ゐる様にしたらば一層よからうと思ふ。がまだ夫れ

迄には運んで居ないのは遺憾である。夫れから次に此器の長所と云ふ可きは其發熱が二ヶ月以上四ヶ月位迄も繼續することである。即ち毎日一度づゝ少許の水を入れてかき廻はして置けば其藥分の盡さる迄數月の長い間常に發熱して居る譯である。是が吾々の様な不省者と貧乏人とは此上もない一大福音ではないか。此點に於て我輩は殊に此種の發明を歓迎する譯だ。何うか多々益此種の發明が出て來て希くは湯わかし飯炊き、乃至は室内の暖房に迄も火を焚かないで自然に獨り手に出来る様なものがほしいものだと思ふ。誰れか發明して呉れまいか（何？請ふ腕より始めよつて！是れは驚いたナニ然らば今考案中だと逃げて置かうかアハ、ハ、ハ）笑談は倍て置いて兎に角此火なし炬燵は專賣特許丈の價値はある様だ唯前陳の様に發熱の度が僕等の様な欲ばりには少し足りないが併し普通のもでも敷温、足温、饜等には充分であり其高熱の方ならば懷爐の様な小さな者に少し入れて

も充分暖を採るに足ることである。

其使用法 是れが一寸慣れものらしい。使用書に依ると器の中へ鐵屑と其薬とを混合して入れたら之に少許の水を入れて豆腐から位のしめりけにし攪拌しろとあるが此豆腐のからは江戸の豆腐がらではいかぬをうだ。元が大阪で發明された器丈に其濕り氣も矢張大坂の豆腐から位にしめらせなければいけないとは妙な話ではないか。何にせよ東京の豆腐がらは大坂のそれより少し濕り氣が多いををだから其積りで少し乾きめにすればよいををであるとして。蒲團の中に入れて置くと四時間から十時間の中には必ず發熱するをうだ（是れが少し待ち廻ふしいね）そこで此際一度火箸で全體をよく攪き廻はして又水を少し入れて置く事始の如くすれば夫れでよいのだと云ふことだ。それから一定の時に殊によく發熱させ様と思ふたら夫より二時間程前によく攪まはして水を加へて置けばよいををだ。

以上は東京に於ける火なし炬燵販賣店員（日本橋區青物町三〇）の話す所と記者の實見した所を摘記したのであるが一體此器の發明者は何處の如何なる人であるかと云ふに本人は大坂市東郡北新町三の五宇那原美喜三と云つて幼少の時から機械類を弄る事が好きで中學三年修業後同市の高等工業學校の機械科に入つて三年間も熱心に研究して居つたが事情あつて卒業するに至らないで退學してしまつた。所が天から與へられた發明工夫の力は是れ位の事で頓挫しないで其後引き続きアセチリン應用の瓦斯ランプ、灌漑用の水揚機械輕便木挽機械等有名な機械を發明して世を益して居つたが近頃は又汽罐製造の事に熱中して其分銅を造る爲めに或藥物を持つて鐵屑をかため様としたらば不思議にも其鐵屑が化學作用を起して非常な發熱をした。それから思ひ付いて色々工夫し實驗した結果が遂に此專賣特許となつたものであると云ふことである。即ち專賣特許權は其藥品にあるの

で現今は大阪市北新町二丁目に住して製造販賣して居る由であるが。價格は炬燵一圓より一圓四十錢足温一圓二十錢より一圓七十錢、藥劑は一貫目三十錢位で二度に遣へるををだ(一度は二ヶ月乃至四月間有効)尙發明人の云ふ所に依ると此藥劑八貫目を三時間用ゆると一石五斗の水を華氏百二十度に暖めることが出来ると云ふことだから學校でも家庭でも之を水槽やばけつ手桶などの底に引き出しを作りでもして應用したらば至極妙ではないかと思ふ。要するに一寸買つて来て直ぐ役に立つて成程至極結構と云ふ譯には行かない様だが應用の仕方次第で可なりに使へる様である。



ホーヘンリンデンの會戰(翻譯)

篋

日はリンデンの野に落そ  
 イーゼル川の黒き瀬は  
 戦鼓夜半にひやく時  
 静かなりけるリンデンの  
 合圖につれてつはものは  
 馬はいくさをいそぎつゝ  
 雷霆山を震動し  
 雷霆ますゝ急にして  
 血はリンデンの野を染む  
 流れも早きイーゼルの  
 戦雲空をおほひつゝ  
 フランク人とフン人は  
 進めますらをもろ共に  
 ミューニヒ人よ勇ましく  
 戦すぎてものゝ衣かも  
 雪はかばねの衣かも

積雪未だ血に染ます  
 冬の空にも通ふらん  
 砲火闇をば照す時  
 姿はもとのものならず  
 共に刃を抜きはなち  
 聲勇しく嘶きぬ  
 軍馬陣地に突入す  
 紅火しきりに閃きぬ  
 戦 今やたけなはに  
 川浪いよゝ黒みゆく  
 朝日の影も力なく  
 烟の中に切りむすぶ  
 死ぬべき時は今なるぞ  
 敵の陣地をいざや突け  
 生きて還るはなかりけり  
 芝生はとはの墓場か



幼兒教育

保育局外觀 其一

田代勝之助

我が校には初等部もあれば幼稚部もある、幼稚部の如きも設備の完からぬ點があつて保育上尠からぬ不便もあること、折々思ひ合はざるゝが、吾等の爲めには幼稚部がある爲めに學校に行くのが一層樂しみなのである、校門をくいると何れも水々しい子供等は満身の愛嬌をばばちや／＼した兩の頬に湛え、帽子の廂に手をかける眞似をしながら「先生お早う」と自分から氣着くもあればお附に注意されてするのもある、いつもの仲よしは我輩が靴の掃除をして居ると兩腕に吊り下がるもあれば帽子を取らうと企つるもあり、ポケットに手を差し込んで電車の乗り換へ切符でもありはせんかと探し廻るのもある、「先生僕がねー」と話し掛けら

れては途中の人生觀も社會觀も一時に意識界を去て、大きな子供となり幸はつて仕舞ふ、オルガンの蔭に人目を忍んで彼等の温い頬に接吻すること度々ないでもない、もし人間の世話(今は暫らく教を避ふる)をすべく運命付けられて居るとせば幼兒を取扱ふ程愉快な事はない、さりながらこれは吾々局外者の感であつて、いざ保育の任に當るとせば非常の困難もあり苦心もあるに相違ない、幼稚園と云ひ保育と稱する以上は教育的でなければならぬのである、お附が只風邪に罹らぬ様、泣かぬ様、怪我をせぬ様に「ぬ様扱ひ、消極的扱をする計りでなく絶えず積極的に仕向けねばならぬ、そして保育の効果茲にあり困難も亦其中に存するのである、さりながら余輩の所謂積極的とは心意の早熟を云ふのではない、いろはを讀み得たからとて少しも豪い所もなく學者となる萌芽とも限らない、遊戯が上手だから、手技が巧みだからとて褒めちぎるにも及ばず、徒らだからとて餘

り八ヶ間敷く攻め立つるにも及ばぬのである、只々自由の精神を宿し、獨立的活動を營む下地と習慣とを附與する様に努むべきである、彼の有名なルソーは兒童十二歳に達するまでの教育を消極的たらしむべしと云ふた、これは餘りに極端ではあるが猥りに雑多の觀念を注入し不相應の作業に従はしむるは斷じて不可である、之を要するに保母たるものは消極的に「ぬ様」扱をする中に高く遠き理想を持つて居らねばならぬ、お附の扱は其日送りで到着點が定かなるまじけれど、保母の扱方は必らず的確な標準があつて一言一行皆其に向て進んで行くのでなくてはならぬ、今日の保育は稍もすると高等お附と小學教師との合の子の様な嫌がりはせぬだらうか?、以下局外觀の二三を述べて實際家の參考に資せんとするのである。

一、保母の組織、理屈上から云へば教育事業中保育程六ヶ敷ものはない、従てより多くの教育ある人を要するのである、教育上の識見もなく心

理學の知識も相應に持たないで保育に當るほど危険はないではないか、誤た觀察の許に訓練を施すほど兒童に取りて不親切な話はない、けれども經濟上其他の關係から今日の處完全なる保母を求むる事は至難の業である、又實際に當りては精密なる觀察と持別の訓練法に依らねばならん兒童は其數も甚だ少ない譯であるから主任となるべきものに相應の學識經驗ある者あれば事足ると思ふ、由來緻密の觀察眼を持つ女子中には自ら其任に堪ふる者も鮮なからぬだらうが尙ほ靴を隔て、痒さを搔く感がある様である、世には園長として地位名望共に立派なるものもあるが實際を指導するには余りに高過ぐるをば如何せん、又保育事業は保母なる文字の示す通りに女と定められた様なものであるが一個の幼稚園には是非共男子の保母を置きたいのである、女子のみでは電車遊びの仲間にも應はしからぬ點があり、角力取りをする事も出来難いし

寄つてたかつて腕を引張り足を擡ち上げて騒き廻る相手にはならんのである、併かもこれ幼児が満身に充ち溢ちたる活動力を漏らすには窮竟の仕事ではあるまいか、而して訓誨を要するに當りても男子の一瞥は女子の數百言に勝る効果を奏する場合もありはしまいか。

二、談話、一般に幼稚園の課業中の一として談話がある様である、兒童の頭は余程詩的なものであるから談話は中々好きである、然るに無味乾燥のものに耳を傾けしむる事は如何にも可哀相である、で一般から見ると保姆の談話は余りに小學校の修身科的ではあるまいか、如何にも表情が少ない様である、どこか羞し相な顔つきで口元を引き締めて居ては到底兒童の心情に突き入る事は出来ないものである、笑ふ時には大口を開いて笑ふべく、怒つた時は眼を圓くして見せ、悲しい話ならば眼に手を當て、擦つて見せる事が出来なくてはならぬ、斯くするのは男子で

三十二  
さへ中々思ひ切つて出来ぬもの故女子には殊に困難であるだらうが其處が教育の妙味である、他人が見て居るからと云ふ中は熱心の足りない證據である。

そして談話が上手になるには落語や講談を聞くのは余程利益がある、其上兒童文學の書類をも讀むべきである、斯くする中には自然と表情も口調も兒童的になる。

思ふに兒童のよく知つて居る材料を面白く聞かせる丈の伎倆を修練せねばならぬ、丁度芝居の様なものが高田、藤澤はホト、ギス、ハムレッツトと材料の新らしいものに依りて觀客を喜ばす芝翫、高麗藏は忠臣藏とか千代萩とかを幾度となく繰り返へしても技術其物を以て觀客を泣かせて居る、それ故に表情の伎倆から云へば舊派は新派に比して慥に一頭地を抜いて居ると謂ふべきである、趣味や理想の高いものには新派が受取らるゝとしても其低い者には舊派でなければ

ば感興を起こさしむる事は出来ない、教育者の  
 談話も之と同様で心意の發達した高等の學生に  
 は教訓に學識さへあれば如何に訥辯でも興味を  
 起こさしめ得るが幼兒には表情が巧みでなけれ  
 ば感興を催さしむる事は全く不可能である、兒  
 童既知の材料を巧みに取り扱ひ得るとせば新材  
 料の如きは誠に易々たるものである。  
 次に幼稚園の談話は「それですから皆さんは：

### いろ／＼の汚點抜き法

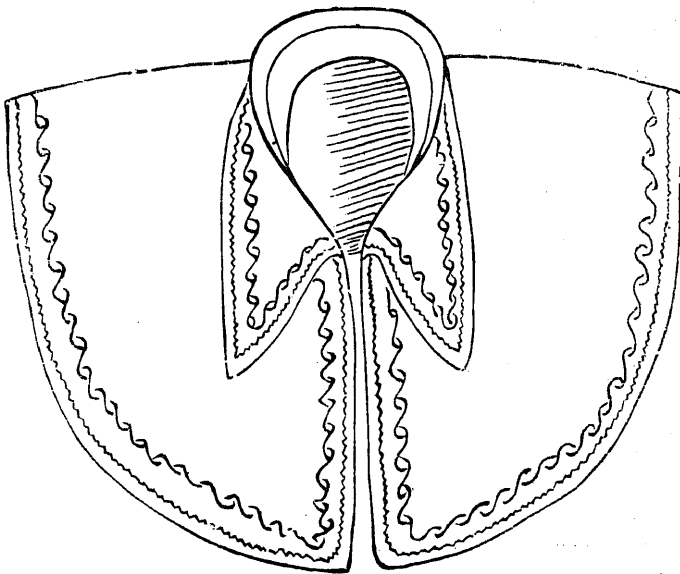
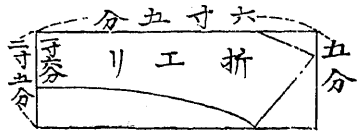
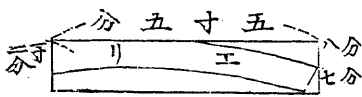
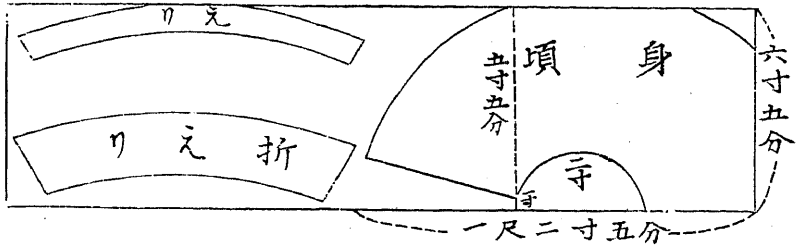
△酒のしみ 酒の汚點は久しく経つ時は抜けざるものなれば成る可く早く水にて洗ふ可し。尙抜けざる時は罏砂とアンモニヤ  
 との溶液にて洗ふ可し。又別法としては大豆の煮汁に半日位浴し置き更に清水にて洗ふ可し。但し酒のかゝれる時煙草の煙  
 をかけ置く時はしみとはならぬものなり。  
 △油のしみ 白砂糖を塗りつけて清水中に洗へ今大抵は落ちるものなり。  
 △糞油のしみ 布をよく張りつけて上より熱き湯を注ぎ可し。汚點は漸次に吸ひ取らる可し。  
 △乳のしみ 毛織物の上に晒しエーテル又はベンズアル油を塗りつけ吸取紙にて拭ひ取る可し。若し絹物なる時は其部分  
 と淡きアルコール液中に浸して海綿にて洗ふ可し。  
 △血液のしみ 少し許りならば燈心に唾液を浸してよく拭く可し。若し血痕多ければ石鹼にて洗ふか或は冷水を口に含みて洗  
 ふ可く又酒のしみを絞き法に應用するも可なり。汚點濃きときは最初湯にて洗ひクエンサンと酒石酸とを同量に加へて汚點の部  
 分に塗りつけて洗ふ可し。其部分に酸を塗りつけて洗ふ可し。汚點濃きときは最初湯にて洗ひクエンサンと酒石酸とを同量に加へて汚點の部  
 分に塗りつけて洗ふ可し。若し又白表に錆のつきたる時は桶に熱湯を入れ、其部分に塗るときは三時間にて汚點消ゆるが故に  
 △尿のしみ 洗きアルコール三箇かの確酸を加へたる五勺ばかりの液に一升位の水を加へたる割合の溶液にて洗ふ可し。  
 △ペンキのしみ 揮發油にて洗ふ可し。煙草の脂を除くには初め味噌汁にて洗ひ次に清水中に洗ふ可し。  
 △脂のしみ 揮發油にて洗ふ可し。

……なければなりません……」と云ふ風に  
 最後に教訓的の抽象した言葉を扱ひるのは好まし  
 からぬと思ふ、是非曲直の判断は談話の模様  
 によりて兒童自らが出来る様仕向けねばなら  
 ぬ、又談話の材料は必ず教訓的でならぬと考  
 ふるのも僻見である、談話の目的には徳性涵養  
 の外に或る物があるべきである。

(以下次號)

方ち裁

図るたり折につニ



出来上り

### 四五才小兒の廻し

岡本 ちか

和服の上にも、洋服の上にも、用ひられまして、最も輕便で、暖く且つ可愛らしく見えますから、今其裁ち方と、縫ひ方とを御話し致します。

用布は羅紗か、ネル或は又絨などが、最も適當で御座いますして、

表は幅一尺三寸、長さ二尺五寸五分程、裏は一尺三寸程入用で御座います

縫ひ方  
身頃及び折えりなどに、出來上り圖の如く、飾縫をなすか、或はレッテなどをつけます時には、先づ表のみにつけて置きまして、後身頃の方も、折えりの方も、裏を合せて縫ひ、表に引返します。

次に衿にも、前の折えりを、狭みて縫ひまして、後表衿は表身頃につけ、裏衿は裏にてまつりまして、衿先の處に、一寸ホックをつけます。

(注意) 成るべくミシン縫がよろしう御座います、又小さく返針に縫ひましても差支はわりません

### 料理



石井泰次郎

#### 蛤のおかべ包

蛤むきたるもの三合を、洗ひて水氣を切り置き、摺鉢に入れてすりつぶし、それより鍋に入れ、火にかけ、箸にて絶えずかきまわし居るべし、蛤の煮えるに隨ひ、蛤はかたまり、水のたぐさん出づる故、其水を、別の器に移し置き、蛤の方へ醬油とみりんを、加へて味を付け、鍋をふるし置く

豆腐小三つを、よく水をしぼり、すりばちに入れ、てすり、馬尾篩にて、裏ごしにし、十個位に分ち丸め、少し薄くのばして、前の蛤を同じく十に分ち、其一つ分を取り、中に入れて包み、よく手にてにぎり置く、かくの如くみな作り、

さて、胡麻の油を煮立て、其中に入れて、揚ぐる

なり、

前の蛤の汁の器へ取り置きたるをば、鍋に入れ  
火にかけ、煮立ちし所へ醬油を入れ、汁を作る、  
揚げたる蛤は、二つ三つ位づ、深皿に盛り、  
右の汁をかけて出すなり、

玉子どうふの拵方

玉子を一一つ器にわりこみ、箸にてかさませ、  
(其量二合ばかりとしては) それに鯉養汁を、冷  
して、一合五勺ばかり加て、みりん煮切二勺、醬  
油二勺を合せ入れ、箸にてませ、これを蒸す鉢に  
うつし入れて、蒸籠にそつと入れ、湯鍋のよく煮  
たちたる上にかけて、鉢の中を箸にてかきたてな  
がら、すぐ蒸籠の蓋をして、むす事十分間ばかり  
して、上の面のかたまりたるを見て、蒸籠の蓋を、  
すこしすかして置き、あと十分間むし、残らずか  
たまりたるを見て、おろして取出て、杓子にて、  
鉢の中より、大きくすくひて四人分の椀に分ち入

れて、上より椀の汁をつぎ入れ、膳にのせるなり、

○椀の汁は、鯉魚煮汁、水一升にけづりがつを十

五匁のわりにて、湯の煮たちたる所(ぐらぐら)

と煮えすぎぬ前に)へ鯉魚を(粉をのこして入

れぬやうにして能き所のみ入る)入れて、絹

篩にて、他の器に漉こむべし、

四人前には鯉養汁六合を鍋に入れ、煮たちたる所

へ、醬油六勺、味淋酒煮切(一合を入勺に煮つめ

たるもの)六勺、鹽一匁、を加へ味を試み、葛粉

八匁を水一合にてとかしたるを、杓子にすくひ、

杓子ごと汁の中へ入れて杓子をまわして、かく二

度位にして、入れたる葛の煮えたるを見て、すぐ

に鍋を、おろし、

前の玉子豆腐の上につき入れて、進むるなり、

三の葉芹或は、おろし生姜など、添へてよし、

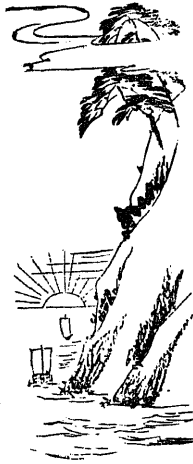
のり巻うど

うどを水にて洗ひ、五寸位に切り湯鍋に入れて湯

煮し水にとり、皮をむきぬちやら酢に漬け置く、

海苔を焼き一枚を四つ位に切り、漬け置きたるう  
 どを取り出し、切りたる海苔の上にのせて巻く、  
 それを更に切らざる海苔にて、七つ位一所にして  
 巻き、一寸位に切りて、皿に盛る、

わちやら酢の捨へ方は、みりん五勺を煮切り、  
 次に砂糖二十勺を水三勺鍋に入れ、火にかけて  
 煮とかし、前の煮切に交ぜ其中に酢三勺ほど加  
 へとうがらし、二三本を小口切にして入れるな  
 り



家庭小説

琵琶の秘曲

堀内新泉

一、  
 常陸國の山奥に、茂作といふ、木訥な炭焼が住  
 んで居つた。

茂作には、兄弟の、立派なる息がおり、兄の名  
 は茂吉、弟の名は茂助。

兄は目下兵役に服して居るので、今年十六の弟  
 は、専ら父を助けて山住居をし、里遠き山中の炭  
 焼小舎に起臥して、毎日炭を焼いて居つた。

頃しも秋の末方に、老爺の茂作は、一日足を痛  
 めたので、止むを得ず、暫く山を下ることに成つ  
 た。

「何らも、飛んだ事をした！これぢやア仕事が出  
 来ぬから、里に下つて、足の痛みを治して来なけ  
 た。」



ればならぬ。一人ぢやア淋しからう、サア、茂助  
お前も一緒に來いや、

「イヤ、お父さん、私は歸られん！兄さんは居ら  
ず、三人とも仕事を廢つては、早速食べるに困る  
ぢやア無いか。私は父兄に代つてこの山に残り、  
骨折つて炭を焼かう」

「でも、お前を一人、この山中に残して行つては、  
乃公は、何うも安心が出來ぬ！」

「ナニ、案じなざるな！私は無事で稼いで居るか  
ら、お父さんは、早く、里に下つて、一日も早く、  
足の痛みを治して下さい！」

二、

茂助は確りした少年であつた。安心させて老爺  
を返し、自分は一人山中に止まつて、毎日愉快に  
稼いで居つた。

その後、程なく霜が下りると、山は俄に五色に  
成つて、何んとも云へぬ好い景色！

特に茂助が住んで居る小舎の近所は、まるで錦

の幕でも張つたように成つた。

毎年見馴れた茂助の眼にも、その儘見ては居ら  
れぬと見えて、炭を焼きながらポキ／＼と、朝露  
に紅の滴るような紅葉の枝を折り取つて、萱で葺  
いた小舎に挿したり、又は、炭釜の近所に挿した  
りして、若き山人の心は愉快に満ちた。

三、

程なく月の夜が來た。

一夜茂助は炭釜の蓋をして、サア最う寝ようか  
と思つたが、餘りに月が明かなので、釜の前に立  
つて、里人は想像の及ばぬ、秋の山中の、月夜の  
景色に見惚れて居ると、忽ち聞く、何處とも無し  
に、何んとも云へぬ面白い琵琶の音！

茂助は驚き、始めは、我が耳を疑つたが、或は  
遠く、或は近く、或は溪聲の木枯に咽ぶが如く、  
或は春水の寛々として行くが如く、忽ち急に、ま  
た緩く、音色床しく聞えるのは確に琵琶の音であ  
つた。

四、

その翌夜は、更に、美しい月夜であつた。例の通り、茂助は炭を焼いて了ひ、今夜は最う、昨夜のやうな面白いことはないかと思ひ、何んとも云へぬ静高潔な、山中の夜景に凝然と見惚れて居ると、今夜は、後の山の八合目邊に方つて、時違へず、琵琶の音が聞え、聞けば、聞く程、面白さが加つはて、茂助は我れ知らず、獨り手に踊り出した。

何人のすさびとも知れず、今夜もやゝ暫く、琵琶の音は、明月の下に聞えて居つたが、次第次第に絶えて終つた。

五、

その翌日から、茂助は大人の二人前も、仕事か出来るようになつた。何故だといふと、彼は何んなに働いても、「今夜また彼の面白い音を聞くのだ！」といふ樂みか、茂助の心を勇ませるので、彼は何んなに働いても、少しも疲れを感せぬので

あつた。

人は勇氣が無くてはいかん。まだ一少年ながらも、茂助は、我れ一人その山中に止まつて、父の業を助けようと云ふ勇氣を有つて居つた。

人は同時に、愉快の身に離れては成らぬ。父は療治に下つた後でも、茂助は少しも淋しがらず、我れ一人止まつて居るその山中に、何か面白い事はありはすまいか、イヤ必度あるに違ひないと確信し、早くその面白い事に出會ふのを待つて居た。茂助にして、若し、斯う云ふ愉快な精神を有つて居らずに、怖れを抱いて我れ一人、この山中に残つて居たら、何んな怖ろしい怪物が出て來たかも知れぬのだ、心の迷ひといふ奴は、いろ／＼な怪物に形を變へて、人を苦めるものだといふ事は、常に記憶し、かかねば成らぬ。

六、

「サア、今夜も亦面白いぞ！」と確信して、茂助は終日働いて、こゝにその日の仕事を終り、炭釜

の前に焼火をして居ると、今夜はスグ溪川の向ふの岩の上、其處には技振の好い、紅葉の紅く照つて居る處で、ソレ聞え出したと思ふと、歌の聲まで好く聲える。

「さて、淺間しの人世や」

ピン〜！。

「さて、淺間しの人ごゝろ」

ピン〜ピン！

「我れをのろひてつ島に」

ピン〜ピンピン〜……………」

茂助は、凝然と聞き惚れた。

琵琶は忽ち急調に、

ピン、ピン、ピン、ピン、ピイン、ピイン

……………」

茂助 愉快に絶えかねて、今夜も立つて踊り出した。

七、

翌日も亦切切と働いて居ると、母親が案じて、

山深う登つて来た。

彼の女は我が息子の無事な顔を見るまで、いろ〜胸を痛めて居つたが、いよ〜小舎の側に來て、一生懸命に、炭を焼いて居るのを見て安心し、第二にはその邊に、澤山炭の焼けて居るのを見て、雷ならず喜んだ。

「オ、茂助、お前は無事で働いて居たか、嘘、まわ、淋しい事であらう！」

「ア、おツ母さん、善く來て下さつた！私はこの通り、毎日愉快に働いて居るが、お父さんの、足の痛みは何うでしょう？」

「イヤ、大きに快いが、たゞ、お前の事はかり心配して！」

「私はこの通り達者で、木を伐るにも、炭を焼くにも、毎日愉快に暮して居るから、何うか心配せぬように、ゆつくり療治をなさるよう、茂助が云つたと傳へて下さい！」

「まわ、何んなにか喜ぶだらう！」

「私も便を聞いて安心！」

「ア、私もこれで落着いた！まあ、その邊の紅葉の見事さ！だが、夜は定めて淋しからうね！」  
慰めながら、母は風呂敷包を解いて、いろいろな食物を取り出した。

八、

安心させて母を返し、茂助は再び仕事に着手つて、夜を樂みに、その日を暮した。

世界最大の大慈善家

メキシコの鑛業家ベドロアルバアラドと云ふ人は先頃二千万圓と云ふ大金を同國の重民に給與するに決して此事を同國の政府に申出たそをで同國の大統領は五名の委員に命じて其分配方法を講せしめつゝありと云ふことです。

此アラバアラドと云ふ人は同國中では非常な資産家で其財産は殆んど計算することが出来ない程で嘗つては同國の國債全部を一人で辨償し様と願ひ出て政府が許さなかつた位だそうです。

そして氏が一生の願と云ふのは何うかして世界第一の慈善家になりたいと云ふのだそをで米國のカイネギーなどは遠く押し退けてしまつて世界の無比の大々慈善家になつて力の限り其無盡藏の富を慈善の爲めに遣ふと云ふのだそをです。何と豪い人があつたものではありませぬか。是でこそ始めて富の價値が表はれると云ふものです。

今夜も早、炭を焼いて了つたので、少年は焼火の前に寛いで、モウそろ／＼始まる時刻だと待つて居ると、今夜は直様我が前で、琵琶の聲が起つたと思ふと、美しい長い美事な鬚を有つ、温和な白衣の老人が、焼火に近く座を占めて、これ聞けがしに撥を執り、琵琶の秘曲を奏てるのであつた。

(をほり)

お伽訓話

不思議の裁判

あづま

さてもひかしく、まづある處に善右衛門に欲兵衛といふ二人の大金持が居りましたとさ。二人とも、何千萬圓とも數へ切れない程のお金を持つて居るのですが、善右衛門の方は、大層心掛のよい人で、他人が難義でもして居るといふと、自分の事の様に世話をしたり、助けてやつたりしますので、世間からは、佛の善右衛門様佛の善右衛門様といはれて、丸で神様か佛様の様にありがたがられて居りました。夫に片一方の欲兵衛はどうかと申しました、全く其名の通り、身體中慾の塊りかとも思はれる位、慾ばりで、慾ばりで、他人の事といへば自分の家の塵一本でも出してやる事は大嫌、おまけに意地の悪いことも、この上な

しで、他人に迷惑のかゝるのは、どの位でも構はない、なるべく自分の損の行かない様に行かない様にと心掛けて居ります。夫で、世間では、鬼の慾兵衛、鬼の慾兵衛といつて、誰も彼も悪んで居ります。

四十二

所が或時のと、善右衛門のお友達の誠助といふのが、これも大した大金持でしたが、商賣で大損をして、其上何かの裁判で負けたといふので、大層な借金が出来て、よほど困つて、善右衛門の所へ相談に來りました。他人の事を自分の事の様に心配する善右衛門のことですから、夫を聞いて、「や、それはどうも御氣の毒なことだ、何、宜しい、私が一つ骨を折つて見ませう」といふので、家にある金を悉皆出して仕舞つて誠助の難義を助けてやりました。

善右衛門は、悉皆家のお金を出して仕舞つても幸ひ、自分の船が、今少しすると、大層な荷物を積んで這入つてくるといふので、安心して居たので

すが、運の悪い時といッたら、仕様のないもので、丁度其船が河口まで来てから大風で以て難船をして、荷物から何から、悉皆流されて仕舞つたのです。

さあ、こうなつては善右衛門も仕様がな、今までの大金持は、丸で一文なしの貧乏人になつてしまひました。

そこで、善右衛門は、何でもこの大損をとり返さねばならぬといふので、難船したのと同じ様な船を、も一艘造ることになりましたが、さて困つた事には、其お金がない、いろ／＼工夫して見ても無いものはとんとないので、仕方なしに、慾兵衛に借りて来ようと思つて、慾兵衛の家へ尋ねて参りました。

さて、慾兵衛に遭つて、だん／＼話をしました所が、一體慾兵衛は、平生から、善右衛門が、世間で評判のよいのを大層嫉んで居つた所ですから、この話を聞いて、心の中では、「それ見る、いゝ氣

味だ」と思つて嘲笑つて居りましたが、態と、氣の毒相な顔をして見せて、

「へ、一、夫はどうも御氣の毒さまな、そして、一體、どの位お貸し申すので」

と聞きましたので、善右衛門は

「さよう、まづざつと千萬圓」

「えつ、千萬圓、大層なお金で、そして其質物には何を置いて下さる」

「さあ、質物つて別に何もありませんが……」

「いや、夫ならお断はり致しますせう。質物なしにお金を貸すことは、私の家の代々の禁物ですから、はい、其御相談は何れ又……」

善右衛門もこれには、大層弱りましたが、

「まあ、そう仰らないでおき、下さい、なる程質物といつては何もないが、其代り返す時に返さなかつたら貴下の望のものは、何でも上げる、たとへば私の生命でも」

生命といふのを聞いて、慾兵衛はひよいと考へ付

四十三

きました。いつも氣に食はぬこの善右衛門だ、これを幸に、一つひどい目に遭はせてやらうと思つて

「じや折角の御頼だから、宜しい引き受けました千萬圓お貸し申さう、其代り、約束の日がすぎたら、善右衛門さん、貴下の胸の所の肉の塊を一斤だけ頂きたいもので」善右衛門も、これをさうして、ぎよつとはしました、致し方がない、

「宜しい承知しました」

といふので、其處で期日になつて、其金を返さなかつた時には、善右衛門の胸の肉の塊を一斤惣助に渡すといふ約束の證文を書いて、夫を渡して、とうとう千萬圓だけ借りてきました。そして、其お金で、前にも劣らぬ見事な大船が出来ました。所が、善右衛門は、よくよく運の神に見離されたものと見えて、やつと其船が出来上つたと思ふと、其晩に大きな船火事が起つて、あれ程の立派なお船が、悉皆焼けてしまひました。

さすがの善右衛門も、これにはひどく弱りました。第一こつなつては、慾兵衛に金を返すことができな、い、そうなる胸の肉をとられねばならぬ、と思つていろく工夫して見ましたがどうしても金の出来ようがありませんので、善右衛門の心配は、一通りや二通りであります。其中にとうとう約束の日が過ぎてしまひました。で慾兵衛は、船の焼けたのも知つてゐますから善右衛門はとも、金が返せない、そつだといふと、いよく彼の胸の肉を取つて平素の怨みをはらしてやらうと思つて、居ると、幸ひ約束の日がすぎても返さない、さわしめたと思つて、あるひのことよう切れ相な小刀を用意して、早速、善右衛門の所へやつて参りました。

「善右衛門さん御在宅か、さあ、今日は約束の日だから、お金を返して貰らひに参りましたよ」と門口から、怒鳴つて這入つて行きますと、善右衛門は

「や、これは慾兵衛さん、實はお返しに上らうと思つたのだが、とんだ災難のために、とうとうお金ができなくなつて……」

「あ、そうか、それじゃ仕方がない、お約束の通り、貴下の胸の肉を、一斤だけ貰らひましようよ」といつて、懐から小刀を取り出しますと、善右衛門は

「なる程、お約束だから仕方がありませんが、慾兵衛さん、私の胸の肉を一斤だけ取られることになる、私は死んでしまはねばなりません。そうなる、貴殿は、何時まで経つても、あの一千萬圓のお金を受け取ることができないじやありませんか、おまけに、私の肉だつて、貴殿に取つて、どれ程の代償にもなりませんまいし」

「いや、構はぬ、返して貰はなくつても構はぬ、お前さんの肉が、どれ程にならうとなるまいと、そんなことは放つておいて下さい、」

「それじゃ仕方がない、が慾兵衛さん、物は相談

じや、この肉だけは、どうか堪辯してくれませぬか、其代り、今少したつたら、屹度貴殿に損の行かない丈の御禮はするから」

「といろく頼んで見たが、慾兵衛、どうしても承知しません、何でも胸の肉を取らうといつてばつ切り取る用意にかゝつて居ました。

して居ますと、其處へ誠助がやつて参りました。難儀な所を一旦善右衛門に助けて貰つたが、近頃非常に大儲をしたといふので、前に借りた丈のお金を持つて、丁度今、返しに参つたのであります。そして来て見ると、慾兵衛の爲めに、善右衛門が、胸を切り割かれ様とする所だから、狼狽でこれ、其中へ這入つて、だんく譯を聞いて見て

「や、夫なら幸ひ、私は今善右衛門さんにお金を返しに來た所だから、一千萬圓は此中からお返しすればよい、そして其利子として、こゝにあるだけのお金を差上げ様、まだ足らぬといふなら、幾らでも私の家から持つてきて上げるから、どうか其



胸を切り割くの丈けは宥して下さらんか」

といつて見ましたが、慾兵衛、中々承知しませんが、「いや、期限が過ぎたら、胸の肉を取るといふ約束なんだ、金なら、其期限の時に返して貰らひたかつたんだ」といつて、いよく頑張る、どんなに謝罪つて見ても、承知しないから、誠助は、じつと考へてから、善右衛門に向つて「こりやどうも仕方がない、善右衛門さん、貴下もそんな約束をしたのが悪いんだから、諦めて、肉を上げなさい」

といふと、善右衛門も

「承知しました、上げませう、誠助さん、夫じや後のことを頼みますよ」

と答へて、じつと目を閉ぢて仰向けになりますと、慾兵衛は、「さあ、どうだ、今から切り取るんだよ」

と言ひながら、善右衛門の上に馬乗りになつて、小刀の尖を、づぶつと突つ込まうとすると、誠助

は「や、慾兵衛さん、一寸待つた。

「え、うるさい、何の用だッ

「他じやないが、約束した證文は持つておいでか」

「何、證文、そりや持つてる、そら此通りだッ」

と懐の中から、投げ出したのを、誠助はじつと讀んで見て、

「慾兵衛さん、お前さん秤を以ておいでか」

と問ふ

「秤つて何の爲に」

「そうさ、此の證文には、肉一斤とあるから善右衛門さんの肉をかけんければなるまい」

「なる程、そうだっけ、夫じや急いで取りにやらう」

「夫から、も一つ言つて置くが、確に一斤とあるからには、一斤より多くも少くも取ちやいけないよ宜しいか」

「うーん、そうさな……まあい、確に一斤丈

け切り取らう」

「そうか、じゃ序にも一つ言つて置くが、證文に

四十六

は肉一斤と丈あるんだから、善右衛門さんの血は一滴でも取ることはならんよ」

慾兵衛は、これを聞いて急にぐにやりとなつた

「うーん……誠助さん、肉を取ることは、

もう廢さう、其代り前に言つたお金の方を返して貰ひませうよ」

「いや、そりや行かん、前、私からあれ程、頼んだに、お前さんは肉の方かい、といつて、聞かなんだのじや、夫に自分の都合が悪くなつたといつて、そう勝手になるもんじやない、さあ、善右衛門さんの肉をお取りなさいよ」

「はあて、誠助さんも、眞實に強情な人じや、お金を返して貰つて、肉を取ることを己めれば、善右衛門さんも助かるし、私も……」

「いゝからさ、そんな事言はんで、早くおとりよかい取らんかい」

誠助の權幕は、だん／＼強くなるにつれて、慾助は、だん／＼小さくなつて仕舞つてとう／＼お終

には、涙をこぼして謝罪ましますから、根が人のよい善右衛門ですから、黙つて見て居る譯には行きませぬ、怒つて居る誠助を宥めて、とう／＼お金を返す事にしました、が、誠助は、何處までも慾兵衛の人の悪るいのを悪んで居ましたから、

「夫じや善右衛門さんもあゝ言ふから、此方の言ふ事をさげやお前さんの願も聞いてやらう、」と申しますと、慾兵衛は、もう絶對絶命なんですから、何でも聞きますといふ、そこで、誠助は、

「お前さんは、平素大慾張で、自分の親類でも、何んでも構はない、夫でこの一千萬圓の利子じやが、これは、お前さんの兄さんが、大層な貧乏で食ふに困つて居るから、其家へやるんだよ、いゝか、そして此一千萬圓、これの半分丈は、先日前さんの慾張りを諫めたといつて追ひ出してしまつた、息子の吉次郎さんに上げた上、すぐ吉次郎さん呼び返しなさい、そして残りの半分だ、これは、お前さんの爲に、大勢の人が随分可愛想

な貧乏になつてゐるから、其人等に大きな貨屋をたて、おやんなさい

と、一々指圖をせられた。慾兵衛は勿論、いやで

仕方がないけれども、夫を聞かねば、肉の正身一斤丈け取れといはれるし、しよう事なしに、夫を承知する事になつて、とうとう其金を受け取つて、濟して貰ひましたとさ。

めでたし〜〜

### 編輯記事

從來弘道館でして居つた會費の徴收も、愈先月から本會直接に扱ふ様になつて幹事一同頗る多忙を極めたので、本年は誠に繁劇な新年を迎へましたが幸に事務も整理して雜誌の發行も、定日には必ず發行する事の出来る様になつたのは誠に悦ばしく存じます。

夫れに付けても驚きましたのは會員諸君に會費未納者の多いことです、何卒是は一日も早く御納付下さる様に御願ひ申します。滞つた上に催促のはがきを出す様では拾錢の會費は八錢にも七錢にもなつて終には會が立行かなくなるかも知れません。未納會費の中昨年四月より十二月迄の分は書肆弘道館より催促が参りませう

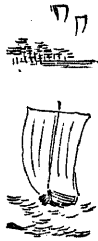
が御拂込は御便宜本會なり。弘道館なり何方へでも御送り下さい弘道館の宿所は廣告欄にあります

本號には短歌選集に差支があつて切迄に間に合ひませんでしたから次號に並べて載せることに致しました。それから先々月分の短歌賞品は幹事非常に多忙の爲め發送が遅れて申すがありませんでした。漸く手がすいたので先月十日發送致しました。あんなに遅れる筈ではなかつたのですが何せ年末に際して會計の引繼と云ふ面倒な事を遣つたので何もかも遅れ勝になりました。何卒惡しからず御諒承下さい。尙本月よりは引續き懸賞で短歌とお伽話と一般の記事とを募集することにしましたから續々御投稿下さい。詳しくは表紙の第三面を御覽下さい。

本號には精巧な紀念繪端書を添へて聊か本月の佳節に對して祝意を表しました。實は本誌七週年の紀念として前號に附けたかつたのですが印刷其他の都合で止めにして、新に此二月號に於て十一日の佳節を祝した次第です。

夫れから會員諸君の御轉居は其都度速に御報知下さることを御志れない様に願ひたく御座います。

雜誌が轉居先不明で毎月幾つも戻つて参りますから



# 教育家の必讀書

## ▲輓近の新好著▼

醫學博士 瀨川昌耆先生校閱  
 福岡縣師範學校主事 織田勝馬先生  
 長崎縣立高等女學校教諭 白土千秋先生

合著

### 小學生救済の原理及其方法

### 好評四版發賣

洋裝菊形全一册(正價金六十錢  
 郵税金六錢)

近時教育に關する諸般の研究殆んど至らざるなし然るに獨り劣等生に關する根本的研究と之が救済法たる實濟的攻究とに關し會て好著の公にせられたるものあるを見ず而も該問題に對する現今實地教育家の態度は宛も大早に雲霓を望むが如きものあり蓋本書は時進の產物と見る可きものなり乞ふ左の條記に依て本書の價値の一斑を推知せられよ

- △本書は先づ劣等生の意義を確定し之が救済上の教育的可能を論せり
- △本書は劣等生に關する各種の原因を詳に探究し之に對する教育的取扱法を極めて實際的に説述せり
- △本書は劣等生救済に關する教育的任務と醫治的任務との區別を明かにせり
- △本書は劣等生救済法として的人格變換論を説述したり
- △本書は劣等生取扱法に關する諸方案并に特殊教授法及各教科目につき教授上の實驗的注意を詳述せり

# 好評嘖々たる遊戯書

廣島高等師範學校教師吉田信太先生作曲  
廣島高等師範學校教師原藤藏先生作技

(好評七版發賣)  
○近刊本書類以の者刊行有之購求者は著者名と發行者名の注意を乞ふ玉石清混する勿れ

國定讀本

## 唱歌遊戯教授書

洋裝菊版  
色クローズ  
無類の美本

尋常科の部 全一冊 正價金八拾錢 郵稅拾錢 高等科の部 全一冊 正價金八拾錢 郵稅拾錢

▲讀め……唱歌遊戯教授に新光明を發はさん教育家は

▲讀め……訓育上、體育上、効果顯はさんとする教育家は

▲讀め……戰後に於る勇健の國民を養成せんと教育家は

尋常科第五版第六版購求者に票告す

曩に發行せし第五版第六版は弊館印刷所三協合資會社に印刷せしめ既に賣切の處其后該兩版の内間々間違あるを發見致候に付右訂正之爲先般來著者に乞ふて精密なる修正を遂げ今般修正第七版を發行仕候に就ては右第五版第六版御購求せられし方は御郵送被下候は、早速御取替可申此段稟告仕候也

所行 弘道館 東京神田區猿樂町二番地

# 大 好 評 嘖 々 の 新 刊 書

◎再版◎ 文學博士 姉崎正治先生著  
**國運と信仰**  
 洋裝四六判形美本  
 全一冊 價一圓  
 郵稅十錢

◎新刊◎ 東洋大學講師 文學士 北澤定吉先生著  
**哲學史綱**  
 洋裝菊判形全二冊  
 正價九十錢  
 郵稅十錢

◎再版◎ 文學士 北澤定吉先生新著  
**偉人耶蘇**  
 洋裝菊判全一冊  
 正價金七十錢  
 郵稅八錢

◎再版◎ 伊藤銀月君著  
**子の半面**  
 洋裝菊判新式意匠  
 正價金七十五錢  
 郵稅八錢

◎新刊◎ 男爵金子堅太郎先生著  
**日本教育の將來**  
 菊判形全一冊  
 價二十錢  
 郵稅四錢

◎新刊◎ 文學士 遠藤隆吉先生著  
**虛無活談主義**  
 菊判全一冊  
 正價四十錢  
 郵稅四錢

● 賜 天 覽

◎新刊◎ 農科大學助手山崎德吉先生共著(密圖十數)  
**養蠶教授指針**  
 菊判形全一冊  
 價正二十五錢  
 郵稅四錢

◎新刊◎ 伊藤眞一郎先生著  
**長壽論**  
 菊判形全一冊  
 正價廿錢  
 郵稅四錢

◎新刊◎ 白土千秋先生 阿部清見先生共著  
**算術教材資料**  
 洋裝菊判  
 全二冊  
 上卷五十錢 下卷六十錢  
 △尋常科用 郵稅各八錢

◎再版◎ 學海隱士著  
**成効 受驗術**  
 ハイカラ形全一冊 洋裝  
 正價金三十錢  
 郵稅四錢

◎新刊◎ 農學博士 横井時敬先生著  
**農業振興策**  
 菊判形全一冊  
 正價三十八錢  
 郵稅四錢

◎近刊◎ 文學博士 元良勇次郎先生著  
**心理學綱要**  
 洋裝菊判  
 全一冊  
 正價金

△受驗者は速に一讀せよ

小兒科專門 小原頼之先生校閱  
女子高等師範學校教授東基吉先生編著

# 新案 育兒日誌

●子ある家庭には必備の寶典

本書は東先生が從來我國に記入の方法の簡便なるが附録兒童身體發育表、小兒の脈搏、體溫、齒牙、睡眠、食物の成分一覽表等に至りては小兒科專門小原先生の指示と校閲とに由實驗的育兒法として又從來の如きといふべく其他教育上の注意の如きも至れり蓋せりといふべし

家庭には是非とも備へざるべし

家庭からざる良書にして又

出産の祝

注意！  
本書の定價は殆んど白紙の代價に等し、白紙の代價を以てして有益無比の本書は購求せらるべきなり

發兌元

東京市神田區猿樂町二番地

弘道館

(舶來上等紙摺)  
洋裝美本紙數凡そ四百五十頁

定價四十錢(總クローソ) (全一冊)

特製五十錢(脊皮洋裝) (全一冊)

郵稅各八錢

● 御法文の節は(婦人と子供)を見たる旨御附記を乞ふ ●

序

井上哲次郎先生  
井上元良先生  
井上勇次郎先生  
井上田歌先生  
井上圓了先生  
井上子先生

文學博士  
文學博士  
文學博士  
文學博士  
文學博士  
文學博士

井上哲次郎先生  
井上元良先生  
井上勇次郎先生  
井上田歌先生  
井上圓了先生  
井上子先生

文學博士  
文學博士  
文學博士  
文學博士  
文學博士  
文學博士

# 山西 惹治 先生 編

中村不折伯家庭園樂三の口繪插畫  
四六判形洋裝函入頗美紙本數百七十六餘頁舶上等紙摺  
壹萬部限特價九拾錢 郵稅五十錢  
滿數後は斷然正價一圓三十錢に復す

購讀者に注意  
幸に此の好書を逸せず購求者は類編者  
め又教育に熱心なる各學校教育家及び學生諸君の備品として推す  
庭の顧問たる各家庭に關して細大漏らさず以て  
順に配列し説明するに必要なる千餘項を  
就て最も家庭に關して細大漏らさず以て  
等に最も家庭に關して細大漏らさず以て  
法結婚制度 禮式 家庭衛生 具料 洗滌 縫製 畜養 遊藝 樂道 藝術 音樂 工藝 通

庭の顧問  
順に配列し説明するに必要なる千餘項を  
就て最も家庭に關して細大漏らさず以て  
等に最も家庭に關して細大漏らさず以て  
法結婚制度 禮式 家庭衛生 具料 洗滌 縫製 畜養 遊藝 樂道 藝術 音樂 工藝 通

末代の寶典  
家庭問題は今に殘されたる社會問題として又戰後必  
然に社會の要求する時代急需の聲に應ぜんとせしむるに  
つる家庭の著書敢て抄き充たさる即ち編者此に周  
るべし一時の苦心抱負を以て新しき福音に接するも  
家庭は此れに依りて光明に浴し新しき福音に接するも  
の用は多し大の依りて光明に浴し新しき福音に接するも  
抄からざるを信す幸に世の流行的一夜作の駄編と同  
視する勿れ本の内容は



發行所 弘道館 東京神田區樂園二番地



御小賣所 花百 亭

十五番地

東京市本郷區眞砂町

申上候

代金引替小包郵便ニ御送附可  
各地方御注文ハ御一報次第

- 一 和洋化粧品各種
- 一 櫛細工材料一式
- 一 刺繡用材料一式
- 一 造花用材料一式

謹告

新年早々には本會並に幹事一同へ對し  
御懇篤なる年賀狀を送られし方々頗る  
多し一々御答禮致し兼候に付茲に誌上  
にて厚く御禮申上候

尙終に望んで會員並に讀者諸君の萬福  
を祈り候

フレールベル會

幹事一同謹白

# 投稿懸賞募集

## 種類

お伽話 本誌半ヶ年分以上三ヶ年分

短歌 本誌四ヶ月分以上一ヶ年分

一般記事 本誌の上本誌に載録せるものは内規により原稿料を呈す

但し右賞品は受賞者の希望に依りて會費と差引き若しくは自ら取らずして其指定する人に本會より直接送ることを得

## 一注意

短歌は随意の用紙にて可なれどお伽話及一般記事は一行廿二字詰にて半紙又は野紙に書かれたし原稿は凡て返戻致しません。

此募集は期限を定めません毎月十日迄の分を其月に選評し後は翌月に回はし何時迄も引續いて行く積りです。

宛名は本會へ直接御送り下さる。

開き封で應募原稿と標記すれば三十匁迄は郵税二錢で参ります

## 質問規定

本會は讀者の種々なる質問に應じます。婦人と子供と家庭とに關する事なら何でもお尋ねなさい。往復はがきか又は通信料封入ならば早速に御答します。公衆に有益だと思ふことは誌上で説明します。

## 入會又ハ購讀手續

本會に御入會なさうとする方は會費一ヶ月金拾錢の割合で一ヶ年分をまとめて本會に直接御申込下されば直に登録して雜誌を發送致します。會員にならずに雜誌だけ讀みたい方は左の割合の前金で本會か又は賣捌書店へ御便宜御申込下さい

- 一册郵税共金拾一錢
- 六册前金郵税共六拾錢
- 拾二册同金壹圓貳拾錢
- 郵券代用一割増

明治四十年二月一日印刷  
同 年二月五日發行

## 禁轉載

發行兼編輯者 辻本卯藏  
 東京市京橋區南大工町一番地

印刷者 日下主計  
 東京市神田區錦町一丁目十九番地

發行所 フレール會  
 女子高等師範學校内

## 大賣捌所

東京市神田 東 京 堂

同 弘 道 館

廣告取次 東京市京橋區新着町 弘 業 社

子操丸鳥人夫爵伯長會

# 義講學女等高

錢十三修束錢十四謝月業卒半年ケ一行發回二月每

●皆さん!!!女でもこれから學問がなくてはなりません

▼本會は近頃の講義録が餘り亂暴な行爲を致しますから其弊を防ぐ爲に成立つたものであります  
▼本會は全國の教育家の贊助により眞面目なる教育の企圖になつたものであります  
▼本會の講義は皆さんが自宅で獨習の出来るよう工夫をこらして丁寧に講義してあります  
▼本會卒業生は貸費生其他の持待があります

●本會に入錢がないで、家に居乍ら、女學校に居ると同様の學力がつきます

の家庭雜誌

# 大家庭

第二卷第三號一月廿五日  
第二卷第四號二月廿五日

發行

△材料豊富にして記事清新家庭の讀物の上乗なるは多言を要せず

定價一冊金七錢郵税金五厘六冊前金四十錢 十二冊前金八十錢

明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可

呈進則規錢五十二冊一本見

番壹壹壹壹座口金貯替振

女禮式	花湯插花	同校訓	裁縫	家事	同科	同理	地理	英語	圖畫	同史	算術	習字	國語	修身	擔任講師	
女子實業	日本女子大學講師	東京弘文學院教師	日本婦人正風會長	女子高等師範教授	高等家政學校教授主任	女子高等師範教授	東京高等女學校教授	東京高等師範教授	東京高等女學校教授	東京高等師範教授	東京高等女學校教授	東京高等師範教授	東京高等女學校教授	東京高等師範教授	東京高等女學校教授	東京高等師範教授

市川源三 岩田彌平 生駒萬吉 稻垣太郎 峰岸米藏 依田白敏 森田夏苗 池田通郎 小田常三郎 牧島三郎 竹川茂郎 森本勉 塚本み子 宮川千鶴 市村鶴子 吉橋な子 兒島文茂 金太仁作 中島義弑